

は じ め に

子どもたちの学びが克明に記された50ページを超える授業記録。その記録をもとに「観音寺のレタス農家の教材化」や「オープンエンドによる問いの連続」等、主張点を明確にした出濱大資先生の実践発表。また、研究会に参加された先生の考えをうまく引き出す山内秀則先生の司会。さらには出濱先生の意図を解しながら実践を価値づけていく亀井伸治校長先生の指導。まさに香社研の人材の豊かさを感じた学年別課題研究会（於：金沢市立弥生小学校）でした。

10月27日と28日の両日、全国小学校社会科研究協議会石川大会に参加しました。

大会主題を「自ら社会に参画する力の基礎を養う学習 ―自分発、社会経由、自分行―」と設定し、1日目の全体会は、石川社研の提案、文科省の澤井陽介調査官の指導講評、世界的なパティシエの辻口博啓氏の記念講演がありました。2日目は3会場に分かれ、授業公開、基調提案、国士舘大学の北俊夫先生による指導講話、学年別研究会と充実した2日間となりました。

今回、石川大会に参加して様々なことを考えましたが、2点について述べてみたいと思います。

今年の香社研の夏季研修会において、合田雅気先生に「農家の仕事」を提案していただきました。

その提案を基に、出濱先生は、再度、農家の取材や教材開発を行い単元を修作しています。その実践を石川大会で発表されたのです。今年の夏季研修会での提案発表は、出濱先生の実践に止まらず、学校訪問での研究授業に取り上げられたり、各支部の社会科研修会において追試の授業が行われたりしていると聞いております。このことから、かつて香社研が大切にしてきた「何人もの社会科教師が、時間をかけ、案を温め、練り上げようとする研究風土」が甦りつつあるように思います。

その二つは、澤井先生が指導講話の中でおっしゃった「子どもたちは本気で学んでいるか」「話し合いをすれば高まるとは言えない」という指摘です。そして「問題解決学習のスタートとなる学習問題の質」「価値ある内容と絡ませた話し合いの大切さ」についても述べられました。私には、「確かに方法も大切だけど、やはり社会科は内容でしょう」とおっしゃっているように思えました。

この話を聞きながら、本年度の香社研の夏季研修会における先生の講演も、内容に力点が置かれていたことを思い出しました。その時、取り上げられた内容の視点は、以下の4点だったように思います。

「再点検！新学習指導要領社会科の授業」の講演から

- ◎ 社会的事象のつながりの認識
 - 1 社会的事象の成立には条件が関連している
 - 2 社会は様々な立場の人々が連携・協力することや理解・尊重し合うことで成り立っている
 - 3 社会には役割やルールがあり、それぞれが責任を果たしている など
- ◎ 人間の生きる姿の認識
 - 1 人々の工夫や努力が社会的事象を支えている
 - 2 人々の願いが社会的事象を支えている など
- ◎ 変化・発展の認識
 - 1 今ある社会は過去の人々の働きによりつくられた
 - 2 人々はいつも課題を解決し、社会を発展させようと努力している
 - 3 これからは持続可能な社会を考えていく必要がある など
- ◎ 私たちの生活とのかかわりの認識
 - 1 社会的事象の働きが、私たちの生活を支えている
 - 2 社会的事象は、私たちの生活に影響を与えている
 - 3 私たちから社会的事象にかかわることが大切である など

2011. 7. 26 (火)

この3年間、香社研は、意欲・思考力・評価について研究してきました。決して内容を疎かにしてきたわけではありませんが、次年度の県大会、平成28年度の大会を見通す時、上記の4点を参考にしながら、内容研究について考えてみる必要があるように思います。

最後になりますが、来るべき大会に向け、今、香社研は、若い力の台頭とそれをうまく活かしている経験豊かな先輩教師が絡み合って、着実に力を貯めていっているように感じます。

香川県小学校教育研究会社会科部会
香川県小学校社会科研究会
(部) 会長 岡 根 淳 二

平成23年度事業報告

1 定例研究集会

○ 6月定例会（坂出・綾歌）

- ・ 月 日 6月18日（土）9:30～11:30
- ・ 場 所 宇多津町立宇多津北小学校
- ・ テーマ 分かる喜びを実感できる社会科学学習の展開
ー体験的な学習・問題解決的な学習の充実を通してー
- ・ 提案者 宮武 克明 先生（綾・宇多津北小） 福家 寿夫 先生（坂・東部小）
第4学年「住みよいくらしをつくる～ごみのしよりと利用」
- ・ 司会者 大西 浩史 先生（坂・西庄小）
- ・ 記録者 山西 由里子 先生（坂・金山小）
- ・ 指導者 森 昭二 先生 唐木 裕志 先生

○ 7月定例会（高松南）

- ・ 月 日 7月2日（土）9:30～11:30
- ・ 場 所 高松市香川町農村環境改善センター
- ・ テーマ 「『社会科』ノートによる思考力の育成を図る」
ー子どもの学習意欲を大切にし、読解力と豊かな言語活動の展開による日々の授業実践の充実を目指してー
- ・ 提案者 木村 舞 先生（高・仏生山小） 轟 秀明 先生（高・大野小）
第4学年「水のゆくえ」
- ・ 司会者 黒川 浩一 先生（高・香南小）
- ・ 記録者 池田 康輔 先生（高・川東小）
- ・ 指導者 岡本 英孝 先生 関根 建一 先生

○ 9月定例会（高松東・西）

- ・ 月 日 9月10日（土）9:30～12:00
- ・ 場 所 高松市ふれあい福祉センター勝賀
- ・ テーマ 「『社会科』ノートによる思考力の育成を図る」
ー子どもの学習意欲を大切にし、読解力と豊かな言語活動の展開による日々の授業実践の充実を目指してー
- ・ 提案者 真鍋 長嗣 先生（高・栗林小） 坪井 孝明 先生（高・鶴尾小）
第4学年「水のゆくえ」
- ・ 司会者 真鍋 長嗣 先生（高・栗林小）
- ・ 記録者 高尾 悠司 先生（高・円座小）
- ・ 指導者 真鍋 康秀 先生 植松 勝 先生

○ 10月定例会（丸亀）

- ・ 月 日 10月15日（土）9:30～11:50
- ・ 場 所 丸亀市綾歌町岡田コミュニティセンター
- ・ テーマ 自分づくりの社会科学学習
ー基礎・基本の定着と自ら学ぶ問題解決能力の育成を求めてー
- ・ 提案者 西川 由華 先生（丸・城乾小）
第6学年「天皇中心の国づくり」
- ・ 司会者 平田 啓介 先生（丸・城西小）
- ・ 指導者 森 昭二 先生 山崎 敏和 先生

○ 11月定例会（小豆・さ東）

- ・ 月 日 11月12日（土）9:00～12:00
- ・ 場 所 高松市銀星旅館
- ・ テーマ 「基礎・基本の確実な定着とその発展を図る学習の展開」
ー基礎基本の内容を習得し、思考力を育てる社会科学学習の在り方～（小豆）
思考力の育成をめざした地域プランの開発～指導に生かせる評価～（さ東）
- ・ 提案者 黒川 幸宣 先生（小豆・湊崎小） 松村 和仁 先生（さ東・本町小）
第4学年「ごみのしよりと利用」（小豆）「わたしたちの県」（さ東）
- ・ 司会者 平林 泰徳 先生（小豆・北浦小）
- ・ 記録者 笠井 誉子 先生（小豆・湊崎小）
- ・ 指導者 真鍋 康秀 先生 佐藤 正文 先生

2 夏季研修会

- ・ 月 日 7月26日(水)
- ・ 場 所 三豊市文化会館マリンウェーブ
三豊市詫間町福祉センター
三豊市詫間町勤労会館
- ・ 内 容 提案発表, 三豊・観音寺社研実践発表, 各郡市社研のワークショップ型実践発表
- ・ 提案者 本部提案 : 大嶋 和彦 (香川大学教育学部附属高松小学校)
三豊・観音寺社研提案 : 出濱 大資 (観音寺市立観音寺南小学校)

分科会Ⅰ：三豊・観音寺社研実践発表

分科会	単元名	授業提案者	分科会司会者
第3学年	「農家の仕事」	教諭 合田 雅気 (観・一ノ谷小)	教頭 高橋 克佳 (観・常盤小)
第4学年	「のこしたいもの つたえたいもの」	教諭 大平 晃司 (観・高室小)	教頭 臼杵 優 (観・杵田小)
第5学年	「情報化社会と私たちの生活」	教諭 黒川 実 (三・大野小)	教諭 片山 浩子 (三・松崎小)
第6学年	「長く続いた戦争と人々の暮らし」	教諭 安藤 通 (観・豊浜小)	教頭 平川 博 (三・比地大小)

分科会Ⅱ：各郡市社研のワークショップ型実践発表

学年分科会		単元名	演習推進者	
			提案者	分科会司会者
3年		「店ではたらく人」	教諭 篠原 正議 (多・四箇小)	教諭 佐柳 仁
4年	I	「水はどこから」	教諭 浅井 由布子 (高・香西小)	教諭 大奥 洋介 (高・円座小)
	II	「水はどこから」	教諭 柏 徹哉 (高・木太小)	教諭 真鍋 長嗣 (高・栗林小)
5年	I	「米づくりのさかんな庄内平野」	教諭 和田 千幸 (さ・長尾小)	教諭 梅本 明宏 (さ・長尾小)
	II	「米づくりのさかんな庄内平野」	教諭 藤井 隆法 (坂・加茂小)	教諭 福家 寿夫 (坂・東部小)
	III	「気候の特色を生かしたくらし」 —十勝平野—	教諭 櫻井 道芳 (丸・飯山北小)	教諭 寒川 英樹 (丸・富熊小)
6年	I	「今に伝わる室町文化」	教諭 白川 由美 (高・多肥小)	教諭 福家 正人 (高・仏生山小)

- ・ 講師 文部科学省 初等中等教育局教育課程課 教科調査官
国立教育政策研究所 教育課程研究センター 教育課程調査官 澤井 陽介 先生
「再点検！新学習指導要領社会科の授業」

平成 23 年度 香社研フィールドワーク 活動報告

平成 23 年度のフィールドワークも、昨年度までと同様に、香社研だけのオリジナルツアーを企画しました。1泊2日でバスを貸し切り、佐賀県、福岡県という歴史導入単位では必要不可欠な事例地を巡り、教材研究を深めたり、会員の親睦を深めたりしました。参加人数も 40 名と昨年より増え、バスがほぼ満席になるほどでした。今年度のフィールドワークの概要を以下に報告致します。

- 1 目的：① 教科書に掲載されている地域を巡り、教材研究を深める。
 ② 教員同士の親睦を深め、ネットワークを広げていく。
 ③ 教科、世代、男女を問わず参加していただき、香社研の輪を広げていく。

2 日程：平成 23 年 8 月 20 日（土）21 日（日）

日次	月日(曜日)	行 程	宿 泊 地
1	8/20 (土)	津田の松原 SA→→→高松中央 IC→→→高松駅→→→坂出駅→→→ (時刻) 6:00 6:20 6:40 7:20 福山 SA→→→下松 SA→→→壇ノ浦 PA→→→吉野ヶ里遺跡→→→ 8:20~8:35 10:30~10:45 12:00~12:40 14:10~15:40 元寇防塁跡→→→福岡市内(ホテルコムズ福岡)→→→うま馬(冷泉店) 16:30~17:30 18:00(着) 19:00~	福 岡 ホテルコムズ福岡
2	8/21 (日)	(朝食：ホテルにて) ホテルコムズ福岡→→→板付遺跡の環濠集落→→→九州国立博物館……太宰府天満宮 (時刻) ~8:30 9:00~10:20 11:00~12:30 12:40~14:00 →→→めかり PA→→→下松 SA→→→福山 SA→→→坂出駅→→→高松駅→→→ 15:20~15:30 17:00~17:10 18:50~19:00 20:15 20:50 (解散) 高松中央 IC→→→津田の松原 SA 21:10 21:40	

3 参加人数： 40 名

4 交通手段： 貸し切りバス

5 各スポット

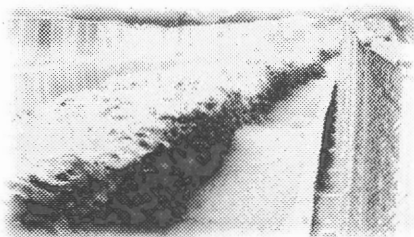
(1) 8月20日(土)

吉野ヶ里遺跡(佐賀県神埼郡)



弥生時代の大集落や、弥生時代の移り変わりを知ることができる日本最大の遺跡。現地のガイドさんによると、この遺跡は、周囲の発掘がされていないために、まだその全貌は見えていないそうです。壮大な歴史的一幕を垣間見ることができ、いつまでも見たいと思わせる遺跡でした。

元寇防塁(福岡県福岡市)



元寇において、元軍を防ぐために築造されたものです。現在でも、当時のままの姿で跡が残されています。今回は防塁について、地元の方のお話を聞くことができました。200mに及ぶ長い防塁が現存していることに歴史の重みがあることを感じました。

(2) 8月21日(日)

板付遺跡・弥生館(福岡県博多区)



縄文晩期から弥生後期の日本でも最初期の集落遺跡。遺跡は、竪穴式住居や掘立小屋の跡等が、当時の大きさに復元されていました。弥生館には、多くの発掘資料がありました。体験ブースでは、弥生時代の衣服を着てみたり、火おこしの疑似体験をしたりして、弥生人の生活の知恵を学びました。

九州国立博物館(福岡県太宰府市)



平成 17 年、108 年ぶりに設置された、最も新しい国立博物館です。国立博物館は 4 力所ありますが、唯一の歴史系の博物館です。

6 年生の歴史単元の導入としても紹介されています。万葉集や月光菩薩像等、歴史的な遺物の魅力にひきこまれる一時でした。

6 旅を終えて

行きがけにはずっと降り続いていた雨が、見学地に着くといつもあがっていました。2 日目には大雨警報も出ていたのに、一瞬晴れ間も見えた旅でした。今回のフィールドワークは、天気にもられるように、学ぶ場、笑う場、共感する場等、場を外さない素敵な旅になったように思います。素晴らしい文化遺産、権力を奪い合う争いの跡もありました。どれも、子どもたちに伝えたいものであり、また、我々自身も未来を照らす道しるべの一部としての役割を果たせたらいいなと感じられる見学地ばかりでした。

また、道中には、運営委員による見学地紹介のプレゼンがあり、参加者からの一言があり、それぞれ独自のパフォーマンスで車内を盛り上げてくれました。夜には、全員で食事会を催し、初めて会う社会科同人と交流を深めたり、お馴染みの仲間と一日を振り返ったりと、参加者のつながりも深まりました。

フィールドワークは 3 年目を終えた今、年々充実した内容になっているのを感じます。来年もさらにたくさんの会員の皆さんと、さらに教材研究や親睦を深めていきたいと思います。

(2) 年間計画等

年 月	平成 23 年						平成 24 年					
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
作成予定	① H24 前期版作成	②	③			④ H24 後期版作成	⑤	⑥				
										- - - - - H24 前期版修正 ・完成		

【役割分担】

- 指導，編集責任者・・・・・・・・・・教頭先生
■世話役（司会，原稿取りまとめ）・・・・・・1名
■編集者・・・・・・・・・・残りの者

	回	日 時	内 容	備 考
24年度 前期版 作成	①	4 / 2 9 (土) 12:30~14:30	担当決め	
	②	5 / 2 1 (土) 13:30~16:30		
	③	6 / 1 8 (土) 13:30~16:30	最終の話し合い	■ 会議の部屋とは別の部屋に、昼食を用意しております。 ■ 来られた方から食事にご案内いたします。 ■ 12:00頃から昼食用意
	提出	7 / 1 (金) 7 / 11 (金)	世話役必着 事務局河田必着	
24年度 後期版 作成	④	9 / 10 (土) 13:30~16:00	担当決め	
	⑤	10 / 15 (土) 13:30~16:30		
	⑥	11 / 12 (土) 13:30~16:30	最終の話し合い	■ 会議の部屋とは別の部屋に、昼食を用意しております。 ■ 来られた方から食事にご案内いたします。 ■ 12:00頃から昼食用意
	提出	1 1 / 2 5 (金) 1 2 / 5 (金)	世話役必着 事務局河田必着	

2 編集・執筆者一覧（敬称略）

指導者

全 体	・ ・ ・	岡根 淳二	（観音寺市立柞田小学校 校長）
第6学年	・ ・ ・	安倍 幸則	（高松市立上西小学校 教頭）
第5学年	・ ・ ・	橋本 義人	（東かがわ市立丹生小学校 教頭）
第4学年	・ ・ ・	臼杵 優	（観音寺市立柞田小学校 教頭）
第3学年	・ ・ ・	早瀬 良子	（綾川町立昭和小学校 教頭）

編集委員

◇ 総括

河田 祥司 （香川大学教育学部附属高松小学校）

◇ 学年責任者

第6学年	・ ・ ・	大嶋 和彦	（香川大学教育学部附属高松小学校）
第5学年	・ ・ ・	山内 秀則	（香川大学教育学部附属坂出小学校）
第4学年	・ ・ ・	黒田 拓志	（香川大学教育学部附属高松小学校）
第3学年	・ ・ ・	藤本 博文	（香川大学教育学部附属坂出小学校）

◇ 執筆者

第6学年	黒川 浩一	（高松市立香南小学校）	森口 英樹	（高松市立十河小学校）
	白川 由美	（高松市立多肥小学校）	轟羽 美緒	（高松市立多肥小学校）
	高尾 悠司	（高松市立円座小学校）	白根 雅史	（高松市立鶴尾小学校）
第5学年	松原 伸二	（さぬき市立造田小学校）	樫原 一宏	（高松市立中央小学校）
	真鍋 長嗣	（高松市立栗林小学校）	白澤一修	（東かがわ市立三本松小学校）
	間嶋 大輔	（高松市立屋島東小学校）	篠原絵里香	（高松市立栗林小学校）
	久保田直寛	（さぬき市立志度小学校）		
第4学年	安藤 通	（観音寺市立豊浜小学校）	萬亀 弘吉	（三豊市立下高瀬小学校）
	岸上也寸志	（三豊市立詫間小学校）	出濱 大資	（観音寺市立観音寺南小学校）
	大平晃司	（観音寺市立高室小学校）	中西 昇	（丸亀市立城北小学校）
	多田 明広	（丸亀市立城西小学校）	大砂古佳美	（丸亀市立飯山北小学校）
	増井 泰弘	（丸亀市立城北小学校）	吉田 良三	（丸亀市立飯山北小学校）
	黒川 幸宣	（土庄町立湊崎小学校）	田村 一郎	（小豆島町立星城小学校）
第3学年	福家 寿夫	（坂出市立東部小学校）	宮武 克明	（宇多津町立宇多津北小学校）
	三谷 沙織	（坂出市立坂出小学校）	勝田 健彦	（宇多津町立宇多津小学校）
	坪井 孝明	（高松市立鶴尾小学校）	瀧 義幸	（高松市立一宮小学校）
	蘆原 秀稔	（高松市立国分寺南部小学校）		

本年度から、教科書をそのまま使用した問題を作ることができなくなりました。そのような苦境の中で、新たな社会科の問題作りに挑戦された先生方に厚く御礼申し上げます。

平成23年度 香社研研究主題について

《研究主題》

「社会科ノート」による思考力の育成

— 「社会科をひらくカリキュラム」の新たな展開による —

～ 平成23年度研究の視点 「学習評価を『自己調整』の過程からせまる」 ～

〈はじめに〉

平成23年度の香社研の研究を進めるにあたり、平成20年度四国社会科教育研究大会の研究と平成21年度・22年度の研究の成果を踏まえ、今後の研究を深めていきたい。そして、平成24年度香小研大会、平成28年度全国社会科教育研究大会に向けて、研究を積み重ねていきたい。

研究主題「社会科ノート」による思考力の育成にあるように、研究の基盤は、思考力の育成を「社会科ノート」の研究によって充実させることにある。その充実に向けて平成21年度は、『学ぶ意欲を高める学習の工夫』の視点から、平成22年度は、『学習材の開発により、集団と個のかかわりを深める』という視点から研究を深めてきた。

21世紀を生きる子どもたちに求められる能力は、「幅広い知識と柔軟な思考力に基づく新しい知や価値を創造する能力」であり、その力をはぐくむためには、何よりも、一人一人の子どもたちの多様性を尊重しつつ、それぞれの強みを生かし潜在能力を発揮させる個に応じた教育を行うとともに、異なる背景や多様な能力を持つ子どもたちがコミュニケーションを通じて協働して新たな価値を生み出す教育を行うことが重要になると考える。(下図参照)

21世紀を生きる子どもたちに求められる力

知識基盤社会

幅広い知識と柔軟な思考力に基づく新しい知や価値を創造する能力が求められる。

グローバル化

知識・人材をめぐる国際競争が加速するとともに、異なる文化・文明との共存や国際協力の必要性が増大

我が国の競争力や子どもたちの学力の低下

生きる力

確かな学力
豊かな心
健やかな体

21世紀にふさわしい学びの創造

子どもたち一人一人の能力や特性に応じた学び、子どもたち同士が教え合い、学び合う協働的な学びを創造

このような子どもをどう育てていくのかということを考えた時、自分が行ったことについて効力感をもつことが大切ではないだろうか。そのような感覚をもった子どもたちは、きっと自ら学びを創造していくであろう。また、その学びの過程においては、教師によって評価されるのではなく自らが判断して自己評価し、自分で自分の学びを調整する力が必要になってくるのではないだろうか。平成23年度は、これまでの研究を土台にして、上記のような国の動向をふまえ、「学習評価を『自己調整』の過程からせまる」という視点から、研究主題に迫っていきたいと考えている。

〈研究の方策〉

1 平成21年度～平成28年度の計画

21年度 (坂・綾)	22年度 (小,さ・東)	23年度 (三・観)	24年度 (県大会(遠野小))	25年度	26年度	27年度	28年度 全国大会
Ⅰ期			Ⅱ期		Ⅲ期		
研究主題(3年計画)			◎ 21,22,23年度の研 究を受けて、県大会 の開催		◎ 全国大会(四国大会・県大 会)に向けての準備		
視点Ⅰ	視点Ⅰ	視点Ⅰ 視点Ⅱ	◎ これまでのまとめ と新しい教育の動き を見て、全国大会の 大会主題(仮)の設 定		◎ 26年度には、大会主題の決 定		
	視点Ⅱ 視点Ⅲ	視点Ⅲ					

2 第Ⅰ期の計画

視点Ⅰ 主に1年次(平成21年度)

- ・学ぶ意欲を高める学習の工夫

視点Ⅱ 主に2年次(平成22年度)

- ・学習材の開発により、集団と個のかかわりを深める

視点Ⅲ 主に3年次(平成23年度)

- ・学習評価を「自己調整」の過程からせまる

※今年度の重点

Ⅰ 「生きる力」の育成を図る「学力」の充実

1 生きる力と学力の3要素

「基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」「たくましく生きるための健康や体力」などの「生きる力」をはぐくむための理念は新しい学習指導要領に引き継がれる。

また、教育基本法・学校教育法の改正において、教育の目標・義務教育の目標が定められるとともに、学力の重要な3つの要素が次のように明確化された。① 基礎的・基本的な知識・技能の習得 ② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等 ③ 学習意欲である。香社研では、平成21年度に③を、平成22年度には①と②を研究面から深めてきた。今年度、研究を進めていくにあたり、学習評価の面から①～③への対応を図りたい。

2 香川の教育課題への対応

学習や日常生活に「好ましくない行動」が起こる原因として、①学力不振、②周囲のサポート不足が大きいものとして挙げられる。今まで教師は、問題行動に「自尊心の不足」を根拠づける傾向にあったが、これは誤りではなかったかという指摘がある。現在では、学力を充実し、サポート体制の確立による「自己効力感」の意識が大切とされるようになってきている。

ところで、「自己評価」を進めることは、今、香川の教育の2つの大きな課題である「学力の充実」と「非行対策」と関わりが深い。それは、「学力の充実」こそが「非行対策」の最大の効果をもつことである。単に社会科教育という面だけでなく、大きな目で見ても、評価、とりわけ自己評価は重要である。

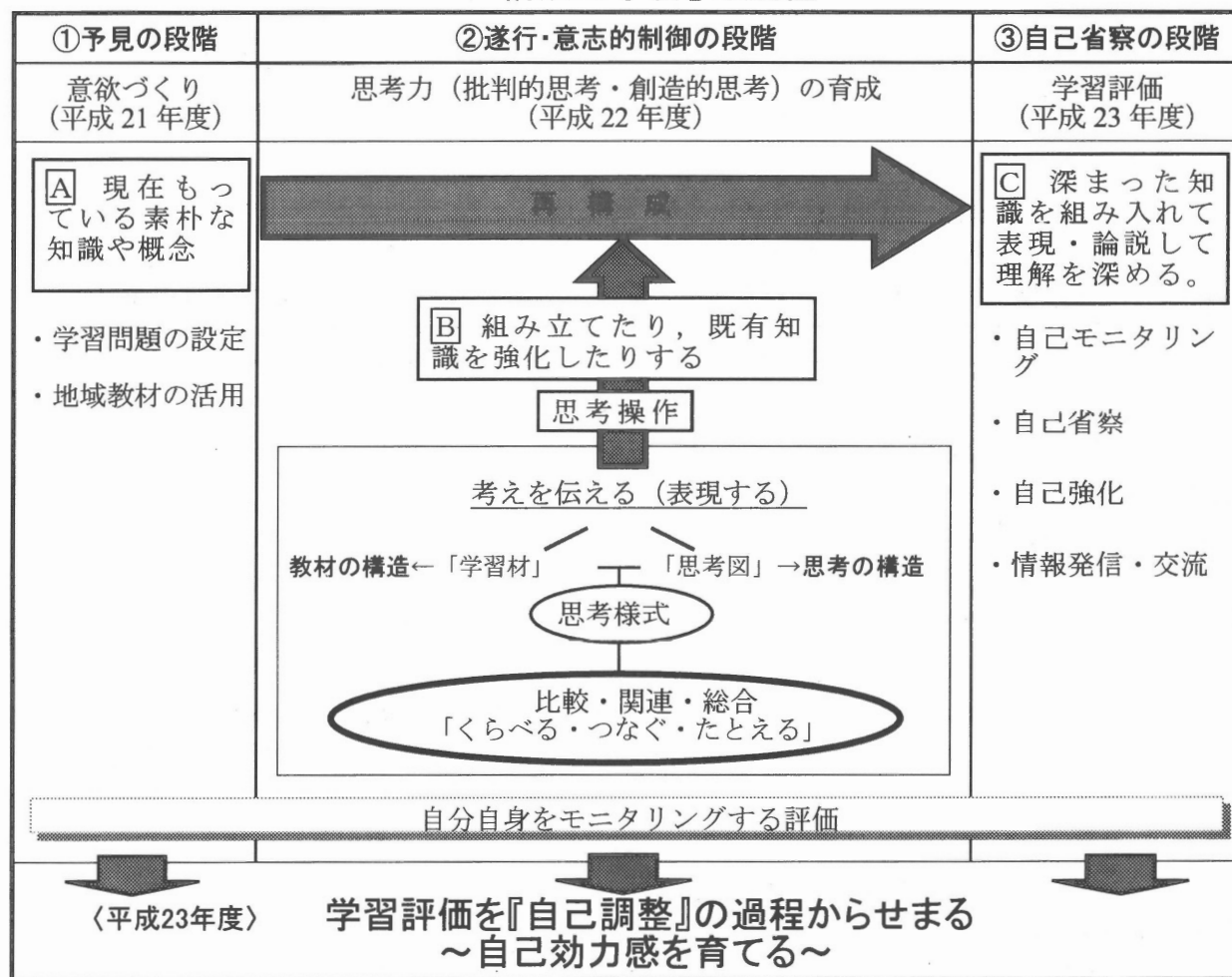
Ⅱ 平成23年度研究主題の探究

1 自己調整の過程としての「再構成の学習」

平成 20 年度四国大会「社会科をひらくカリキュラム」の研究を基盤にして、平成 21 年度は、「意欲づくり」について、平成 22 年度は『学習材の開発により、集団と個のかかわりを深める』という視点から主に「思考力」に着目して研究を進めてきた。平成 23 年度は、「学習評価」の研究に取り組むが、これで第Ⅰ期の研究を「意欲」「思考力」「学習評価」としてまとめることができる。そこで、今年度は、意欲、思考力、学習評価の研究をつなぎ、「再構成の学習」として、実践化を図りたい。

学習は、3つの段階をサイクル活動として展開する。3つの段階とは、「予見」「遂行・意思的制御」「自己省察」である。大まかに言えば、「予見」は学習場面を設定し、意欲的に取り組む計画を立てる段階である。「遂行・意思的制御」は思考と表現の統一による再構成を図ることによって、思考力を育てる段階である。「自己省察」は、総括的な評価を入れた自己評価をする段階と言える。この3つのサイクルが自己調整の過程であり、このサイクルを通して「自己効力感」を育てていくことが重要となる。このことを視点にして、研究の概要を次の図のように考える。

「再構成の学習」の過程



予見の段階では、学習場面を設定し、取り組みの計画を立てる。自己効力感をもって目標設定、課題設定し、方略プランニングと合わせて計画するのである。遂行・意思的制御、自己省察の段階においては、自己モニタリングをしながら自己評価、自己強化をするという自己調整を図る学習を目指している。

思考力は、図のように、**A**「現在もっている素朴な知識や概念」を、**B**「組み立てたり、既存知識を強化したり」して、**C**「深まった知識を組み入れて表現・論説して理解を深める」よう再構成する

ことによって育てられる。すなわち、思考力は[A]から[C]に高めることによって育てられる。その高める過程の活動が、思考様式の活動であり、自分自身をモニタリングによって自己評価しながらの活動になる。

この思考様式による活動は、考えることと伝える・表現することと合わせて「考えを伝える(表現する)」活動である。そのための「思考図」の開発は昨年度重点を置いて研究を進めてきた。思考図については後で詳しく述べる。

2 思考力の育成

(1) 思考力の発達の筋道を意識する

子どもの思考力は、経験を通して得たもの、こと、人について思考を働かせて解釈し、説明する能力を獲得することで発達していく。その過程は、技術(できる・できそう)から科学(わかる・なす)への発展の過程といえる。技術(できる・できそう)は、もっぱら対象にあたって、興味と断片的な知識をもとに知ろうとし、それを利用しようとすることに関心が向けられる。そこで、簡単に問題解決して目標に達すればそれで終わってしまい、その過程を説明することはない。科学(わかる・なす)は目標達成のために、対象にあたって知り、その取り組みの結果に終わらず、さらに深く解決過程を意識して説明していくことに特徴がある。

このように、思考の発達は、①目標に達することに関心をもち、②周辺の活動の段階から始まって、③具体的活動に意味を意識する段階を経て、最後に、④反省的思考にもとづいた論理によって意識的に行動する段階へとすすんでいく。これを、ピアジェは、思考の発達の筋道といい、「周辺から中心への発達」として、特徴づけている。社会科の授業においてもこのような思考の発達の筋道を意識しながら授業づくりを行っていく必要がある。

(2) 思考力をいかに育てるか

思考力を育てるとは、物事を構造的に把握する態度を育てることである。構造的な把握を行うために、種類や用途、場所、時間経過などで分析したり、類別したり、関係づけたり、条件を変えたりしながら、思考そのものが特色としてまとまっていなければならない。思考力を育てることは、知識を構造化している過程としてとらえることが大切である。

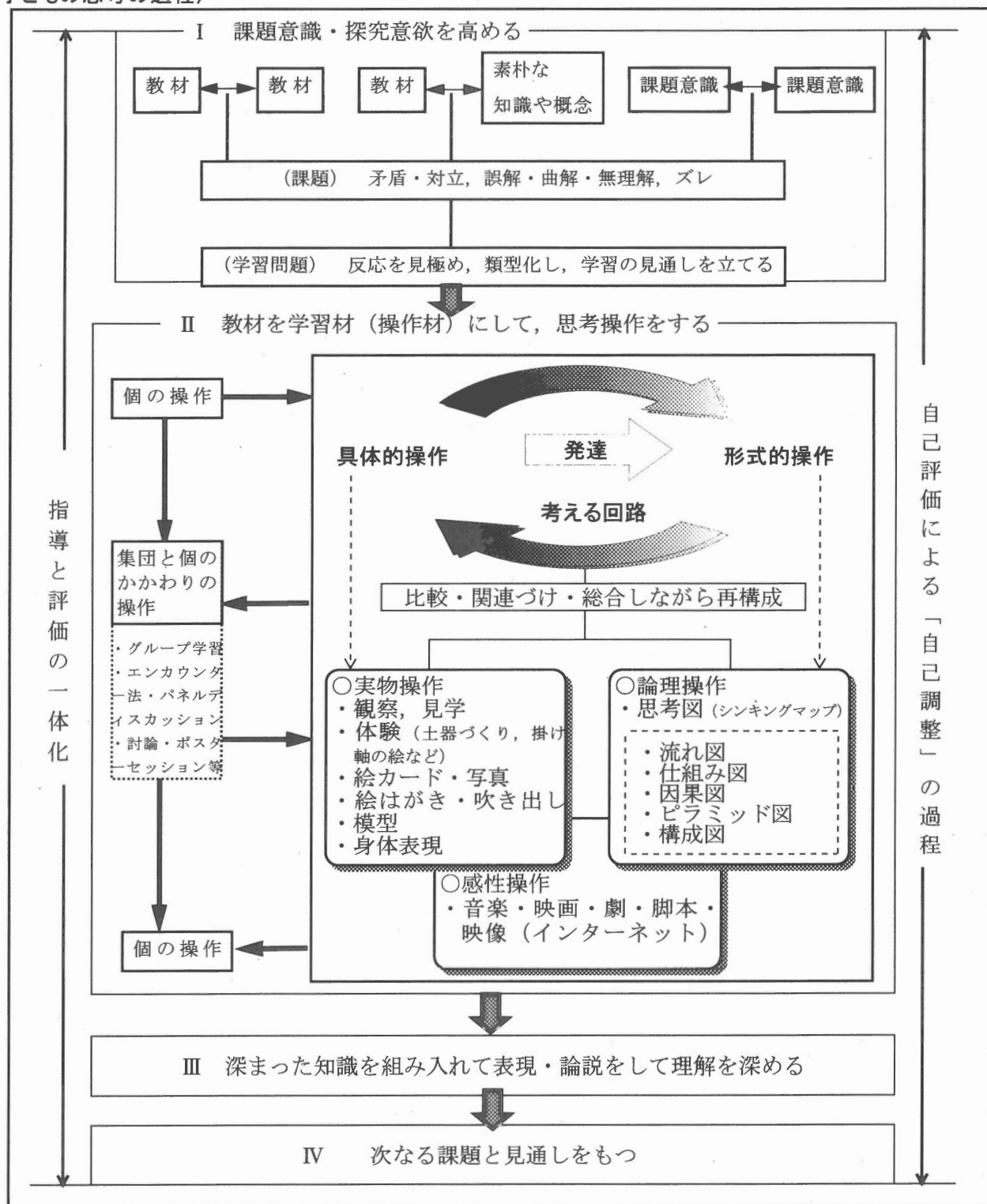
思考力は、従来は、ただ、感受性、記憶、言語、数、推理などばらばらな能力のよせ集めとして、取り扱われてきた。そのため、これら個々の能力を別々に訓練することによって、思考力を発達させることができるものとしていた。だが、断片的な能力の訓練では、たとえ知識として覚えたり、技能として習熟できたものであっても、それだけで、思考力が育つことにはならない。

確かに、読み、書き、計算の技能は、思考力の発達の重要な道具である。しかし、その技能自体が、思考力の発達の原動力ではない。例えば、ことばが読めることと、ことばの意味を理解することとは違う。読みの技能は、習熟だけで獲得できるが、意味の理解は論理的思考の構造を前提とする。そして、この思考の構造は、子どものそれまでの成熟、経験、知識、技能などが組織的に統合されている全体なのであり、子どもの思考構造とのかかわりの中で、学習により、生きて働く思考力になるのである。

つまり、思考力を育てるために大切なのは、正しい知識の理解に当って、過ちやつまずき、意識のずれを自分で発見して、それを修正していく過程である。この自己評価を伴う活動は、思考の構造の中に確実に組み込んで、より正しく深い理解を進めていくことになる。これは「思考力の内面化」と呼ばれている。

思考の質的な発達を促すためには、活動がある点でせき止められるような状況に立たせることが必要である。このせき止められる状況は、社会的事象の矛盾や対立の場面であり、課題や学習問題の設定などの学習活動に生かしていくことで、学習に意欲的に取り組むようになり、飛躍的な発展にもつながってくる。

〈子どもの思考の過程〉



3 思考力を育てるための「教材の構造」と「思考の構造」の明確化

(1) 「教材の構造」を明らかにする

① 教材と学習材

「教材」とは、教科書教材に代表されるように、ある一定の目標を実現するために、基礎・基本の事項や内容を精選して取り入れた素材である。その形態は様々で、事物・事象という形、映像という形、言語や記号で表現した形など多様であり、一定の認識やイメージをもたせることができる。しか

し、個々の子どものもつ認識・イメージづくりに応じるものとは言えないことから、従来は、教科書解釈や教材分析による教師の指導方法の工夫により補ってきた。

それに対して、「学習材」とは、個に応じた学びができる教材であり、「操作材」ともいえる。子どもの個々の学びが成立するためには、教材のもつ価値を十分に踏まえ、子どものもつ具体をもとにして、自然・社会・生活の事象と結び、具体的操作や形式的操作を通して思考や表現を促し、個々の子どもの認識やイメージを深化・拡充させていくことが重要である。

② 教材の精選

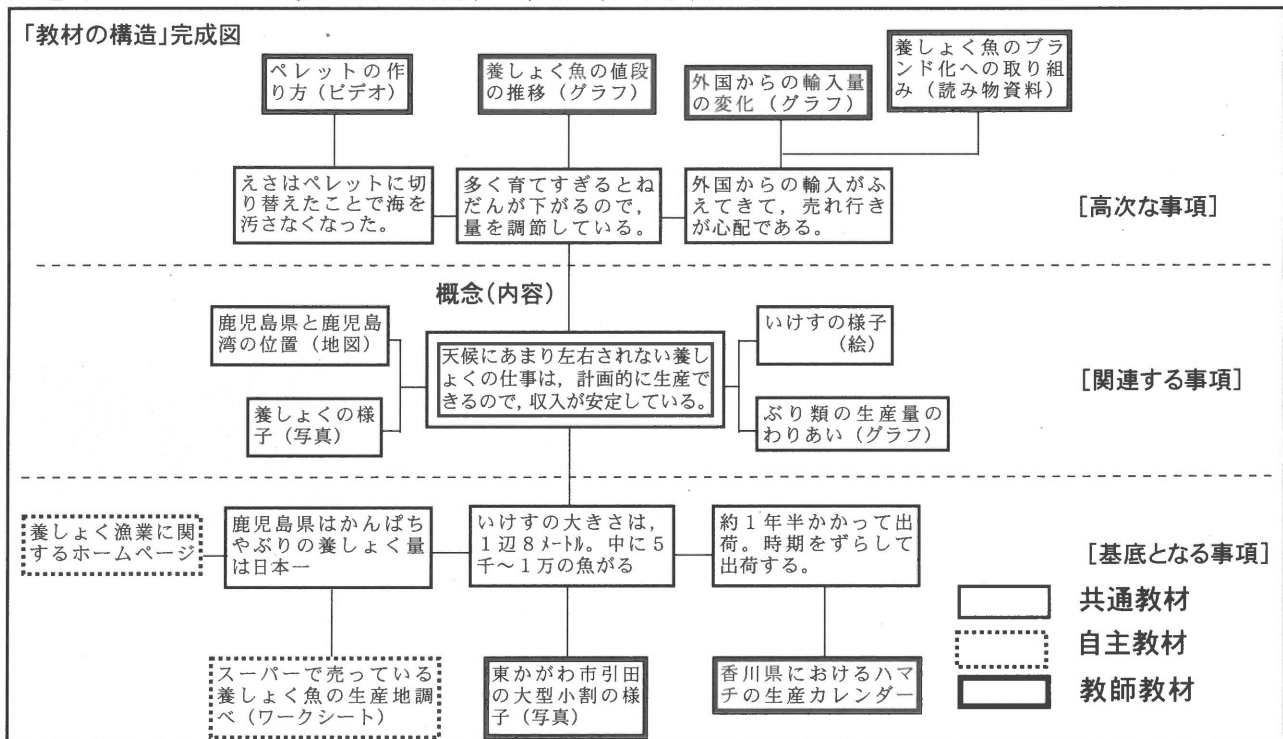
教材は、どの教科等も学問的内容を子どもの発達や興味の実態に合うよう科学や芸術・文化から選ばれたもので構成されており、①「共通教材」として教科書・補助教材 ②「自主教材」として子どもが自主的に活用する参考図書、インターネット、その他の資料 ③「教師教材」として教師・専門家などが提供する資料があげられる。

教材は、「素材・資料」ではない。教材は、学習の目標を達成するよう素材・資料を発達に合わせ精選し、価値づけたものである。このことから、①は教育法規に定められた教材であるのに対し、②と③は素材・資料を教材化しなければ「自主教材」「教師教材」にはならない。

そこで、①「共通教材」②「自主教材」③「教師教材」を入れた「教材の精選」を明らかにする教材の構造化を授業スキルとして昨年度は取り組んできたのである。

③ 教材の構造化

「教材の構造」は、学習指導要領と教科書や補助教材を分析し、「基礎基本の事項」と「内容」を明らかにし、それを基盤とする。次に、「教材の構造」の中心になる「共通教材」である。教科書・補助教材の内容を中心教材と関連教材を構造化して図示する。更に、「自主教材」と「教師教材」を関連付ける。下の図は、教材を構造化し、指導の目安とするために作成した「教材構造化図」である。

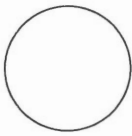
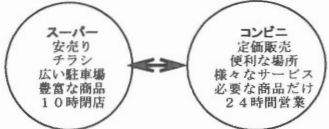
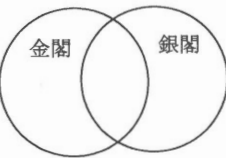
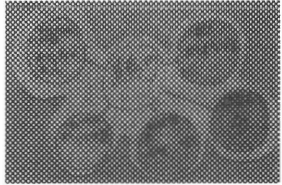
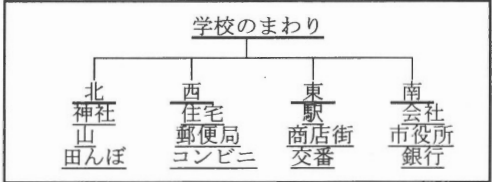
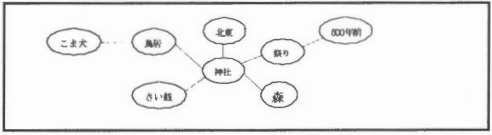
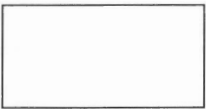
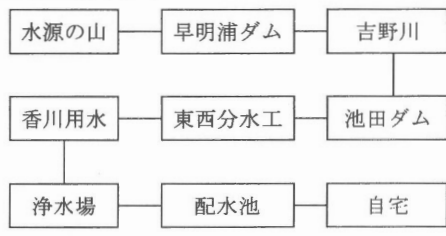
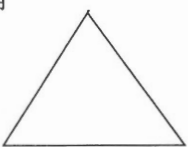
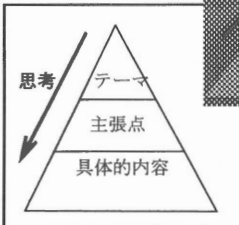
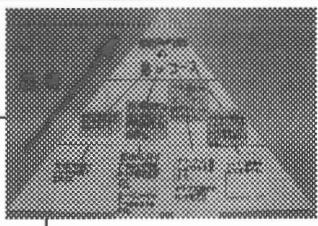
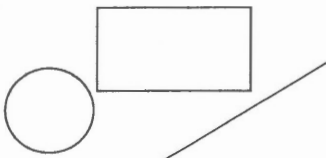
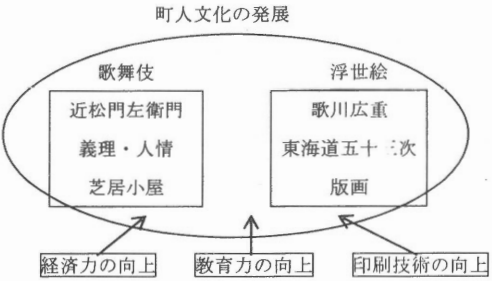


(2) 「思考の構造」を明らかにし、「思考と表現」の一体化による言語活動の充実

思考力は、既存の知識の上に、新しく学んだことを取り入れて、比較・関連づけ・総合しながら再構成を行い、新しい知をつくり上げていく過程で育まれる。教師は、子どもがどのような思考の過程を経て、新しい概念を再構成していくのか見通しておくことが必要である。

そこで、学習材の開発に合わせて、「思考の構造」(子どもが思考する道筋)を明らかにすることによって、昨年度取り組んできた。その中心としたのが、「思考図」(シンキングマップ)の活用である。このこと

次に、思考図(シンキングマップ)の具体例を示す。
 〈思考図(シンキングマップ)の5つの型〉

	名称	思考の様相	例
①	サークルマップ 丸 	分析する 比較する 仲間分けをする 自分の考えをふくらませる	  
②	ツリーマップ 線 	考えを整理する 自分の考えをふくらませる 発想を広げる	 
③	フローマップ 四角 	順序性を明らかにする 原因と結果をつなぐ	水が家に届くまで 
④	ピラミッドマップ 三角 	自分の考えを積み上げていく 考えを概念化する 主張点を具体で述べる	 
⑤	コンストラクションマップ 丸, 四角, 線等の 構成・組み合わせ 	いくつもの考えを構造化し、整理する	町人文化の発展 

4 思考力を育てる評価の在り方

(1) 求める評価観

学習評価は、学校における教育活動に関し、子どもたちの学習状況を評価するものである。学習評価には、目標に準拠した評価（観点別学習状況の評価と総括的にとらえる評価）、相対的評価、個人内評価がある。このうち目標に準拠した評価のうち「**形成的評価における学習評価**」を研究することとする。とりわけ、子どもが思考と表現の一体化による活動を展開する構成主義的学習観に立ち、「再構成の学習」を図る中で、この評価の研究を進めていく。

子どもたちが、知識や技能を学び、受容していくだけでなく、子ども自らの課題に基づき、知識を再構成し、生きて働く知識や技能として学んでいくことが求められている。教師の指導の結果を評価する学習評価ではなく、評価基準に基づく形成的な評価と子ども自身が自分の学びや成長を自己評価することとを一体化することが、構成主義的学習観に立つ評価なのである。

また、「つまずきをなくす」ことが目的の学習評価ではなく、「つまずきを教師と子どもが共に生かす学習」を目指したい。そこでは、つまずきを教師と共に子どもたちが協働して自覚的に克服しようとする姿がある。そこに、子どもたちは、自分の進歩、考えの変わったこと、自分で何ができるようになったか、まだまだできないことは何かなどを自己評価するのである。この自己評価は、自己効力感の高まりとなる。

このような評価観に立つ学習評価を進める上で有効な「評価方法」として、次の2つを挙げたい。

① パフォーマンス評価法

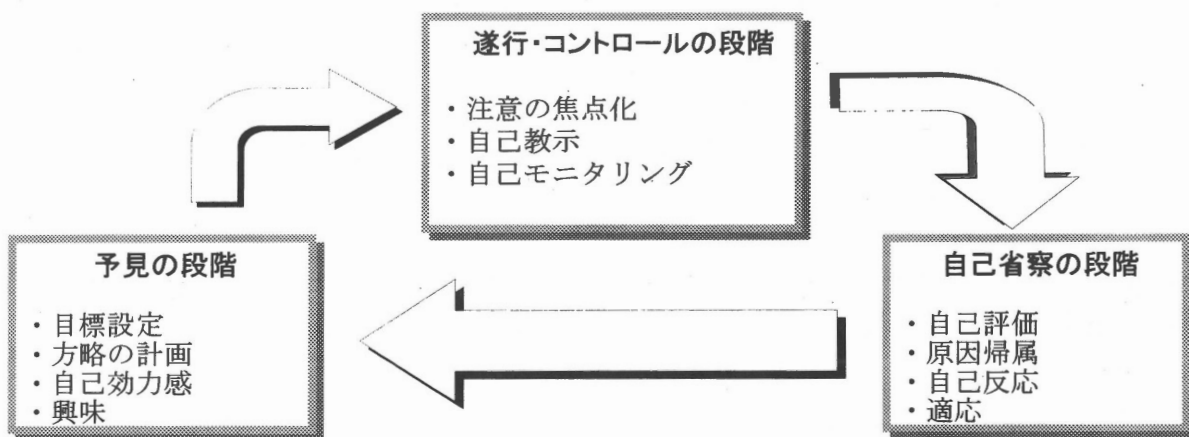
パフォーマンス評価法とは、目標として知識・技能を活用する力を位置付け、パフォーマンス課題とループリックを用いて評価する方法である。

② ポートフォリオ評価法

ポートフォリオ評価法とは、子どもの学習活動の過程や成果などの記録や作品を計画的に集積したファイル等を保存・活用して、子どもの学習状況を評価する方法である。

(2) 学習評価を「自己調整」の過程でとらえる

〈自己調整の過程〉



「再構成の学習」は、学習を認知や情動といった個人的な過程だけでなく、人、環境、行動が相互に関係合って展開するとしている。このように、学習を認知や情動の過程としてとらえることの上

に、人と人とのかかわりや学校・家庭・地域、教育情報資料などの環境や体験、奉仕活動、社会参画活動などの行動の過程としてとらえる学習を構想している。

そして、このことを学習評価の研究にあててみると、評価は学習過程における「自己調整」を図る過程としてとらえることができる。すなわち、結果主義の評価ではなく、学習の過程における「過程主義」に立つ評価であり、このことを自己効力感を高める「自己調整」の過程としてとらえたい。自己効力感とは、一定レベルの行動を遂行したり、獲得したりする能力に関する信念である。それは、人がある事態に対処する際、それをどの程度効果的に処理できると考えているかという認知を重視し、一定の結果へ導く行動を自らやれるという期待を抱く自覚を生じる自信のようなものをさす。

さて、この「自己調整」についてであるが、「自己調整」とは、目標到達を目指し、思考や感情、方略行動を自らが引き起こし、自己の内面を組織的、計画的に機能させていくことを指している。そして、自己調整は、図に示すとおり、「予見の段階」「遂行・コントロールの段階」「自己省察の段階」の3段階の循環的プロセスにより行われる。

(3) 自己評価で大切にしたいこと

- 認知面と情意面が一体となった自己評価が効果的である。
- 自己の語り、日記、ポートフォリオなどが動的資質を繰り入れた自己内省の練習に役立つ。また、ふり返りシートも役立つ。
- 自己評価には、認知的自己評価と情意的自己評価があり、子どもが自ら知識や技能を身に付けたり、獲得した知識や技能を積極的に生かすには、「関心・意欲・態度」のような情意面が基盤として育つことが大切である。
- 自己評価は、自分自身の学習過程について意識化し自己強化することを促し、自己調整を図っていく。

(4) 「自己調整」の過程を社会科ノートに

① 授業改善の視点

現在、学力は、知識や技能にとどまらず学習意欲、思考力、判断力、表現力等を含むものというと考え方をし、その育成を重視した授業づくりが重視されている。

そのためには、次のような視点からの授業改善を行っていきたい。

- 通知表や指導要録の評定のためにだけあるのではなく、授業中での形成的評価として機能させるまた、評価は知識・技能といった見える学力だけでなく、思考力等見えにくい学力も評価対象にできるような評価方法を開発する。
- 学習内容だけの評価ではなく、学び方(学習方法)についても評価を考えていく。

② 「見える学力」の評価

「内容知」における「見える学力」とは、主に都道府県名、主な山地、河川等の名称、歴史的事象等の社会的事象についての知識・理解といった学んだ結果身に付いた知識であり、これはペーパーテスト等で測りやすい。このような基礎・基本の事項の理解の上に立ってこそ、その教科ならではの思考が可能になることは明白である。

③ 「育てたい力(見えにくい学力)」の評価

その一方「育てたい力」としては、その子ならではの「基礎・基本の内容」が挙げられる。これは、その子の学習過程での発言や表現物から、その子の思考の流れを読み取り確実に「定着」しているかどうかを見取るわけであるから、テスト等では簡単には測れないものであろう。

また「方法知（学習力）」については、まさに「育てたい力」である。

学習力には、論述力、討論力、論理的思考力、問題を追究したり解決したりする力などがあるが、それ自体、数値化が難しい。これらの力は、ポートフォリオやグループエンカウンター、ポスターセッション等を体験していく過程で、しかも教師の適切な指導のもとに身に付いていく力でもある。

社会科授業では、自ら主体的に調べ、調べたことを効果的に表現し、表現と思考の連続によって社会的事象の本質について考え、深めていく力を育てていくことを大切にしたい。そのためにも、「見えにくい学力」の評価の評価法として、「ポートフォリオ評価法」や「パフォーマンス評価法」があるが、ここでは、授業評価として、パフォーマンス評価法を取り上げたい。パフォーマンス評価は、パフォーマンス課題に基づく子どもの思考や技能を実際の授業場面で子どもが発揮することを捉えて評価するものである。例えば、小論、レポート、絵や図表、思考図、討論、演技、表現物としての作品などを評価する。ここで課題は、パフォーマンス課題である。パフォーマンス課題は、小単元の学習の見通しがもてる内容と思考・表現を描くことのできる課題でなければならない。単なる学習問題、学習課題では、このことの研究は深く追究できない。それと同時に、「指導」と「評価」の統一で示された評価基準の設定による評価は、具体的には、ルーブリック（評価基準）が大切になってくる。

ルーブリックとは、パフォーマンス課題に対する子どもたちの認識の質的な転換点に基準を合わせて評価の指標を段階的に設定する試みである。ルーブリックの研究実践を積んでいくことにより、より精度の高いルーブリックが作成され、到達目標の明確化による確かな学力の形成がなされるのではないかと考え、今後ルーブリックの開発を行っていきたいと考える。

④ 学び方(学習方法)の評価

学習は、内容の定着はもちろんであるが、学習者が自ら学びをつくることが大切である。思考力・判断力・表現力は、教師の教授技術だけで身につくものではない。いかに、自ら考えていこうとするかということが、非常に重要である。つまり、学び方を自己調整できるということである。

そのための評価方法として、学び方の自己評価を取り入れていきたい。従来、学習内容が、できたかどうか、その時間自ら主体的に学習に参加できたかどうか等を問うことによって学びを自己評価することがあった。しかし、単元全体を通して、自分の学びを見つめ、自分の学びを調整していくことは難しかった。そこで、今年度は、学び方の自己評価を通して、学びを自己調整できる子どもづくりを目指していきたい。

5 評価の実践

(1) 単元の指導計画と評価計画の一体化

評価基準については、平成22年5月に文部科学省から「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」が出され、それを受けて、平成22年11月に国立教育政策研究所より評価基準の作成のための参考資料が示された。さらに、平成23年3月には、評価方法等の工夫改善のための参考資料が示され、具体的な事例を通して、どのように評価していけばよいのかという具体例も示された。

それらを受け、観点別学習状況の評価に係る最適の時期や方法を単元ごとに整理することが重要である。これにより、評価すべき点を見落としていないかを確認するだけでなく、必要以上に評価機会を設けることで評価資料の収集・分析に多大な時間を要するような事態を防ぐことができ、各学校において効果的・効率的な学習評価を行うことにつながると考えられる。

具体的な手順としては、従来作成してきた指導計画の中に評価計画を位置付けるようにする。どの時期に、どのような方法で見取っていくかということも明示する。また、パフォーマンス課題を明確に位置付けることによって、どのような道筋で思考と表現の一体化を図り、どのような思考力を育てていこうとしているのかをはっきりとさせる。それにより、教師がどのように指導していけばよいのかもはっきりとしてくる。

【評価規準を単元構成に位置付けた実践事例】

第5学年 小単元名「くらしを変える情報ネットワークの秘密」

1 評価規準

(表記：関－①，思－①，技－①，知－①)

社会的現象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用技能	社会的現象についての知識・理解
① 情報化した社会の様子に関心をもち、意欲的に調べている。 ② 社会の情報化の進展に関心をもち、情報を有効に活用しようとしている。	① 情報化した社会の様子について学習問題や予想、学習計画を考え、記述している。 ② 調べたことを相互に関連づけたり、情報の活用の仕方と瀬戸内国際芸術祭の入場者数の変化とを関連づけたりして考え、情報活用の方法について自分なりに根拠を挙げて説明している。	① 資料やインターネットを活用したり、聞き取り調査を行ったりして、情報化した社会の様子について必要な情報を集め、読み取っている。 ② 調べたことを整理して、図表や作品などにまとめている。	① 情報ネットワークを有効に活用して公共サービスの向上に努めている取組の様子を理解している。 ② 情報化の進展は、国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを理解している。

2 単元構成 (全8時間)

第1次

「情報ネットワーク」について教科書を概観し、学習問題を設定することができる。 (2時間)

- ◎ 教科書を概観し、情報ネットワークが生活や医療、防災、福祉、教育など様々な場面で使われていることをつかむ。
- ◎ 学校の PTA 携帯連絡網を例にそのしくみについて調べ、模式図に表す。
- ◎ 自分たちで情報を生かし、香川のよさを情報発信する計画を立てる。
- 学校の PTA 携帯連絡網は、緊急時の連絡手段として日常的に使用されている。ネットワークの特性として、即時性、同時性などが挙げられる。
- 瀬戸内国際芸術祭には、多くの県外の方が瀬戸内海の島々に来てくれた。その成功は、情報ネットワークの力だとも言われている。自分たちも、もっと香川の誇る瀬戸内のよさを積極的に発信したい。

発言の内容や話し合いの様子、ノートの記述から、「芸術祭が成功に終わったのはどうしてか調べようという意欲をもつことができたか」「自分なりに学習問題をつくり、予想を立てることができたか」を評価する。

【関－①】【思－①】

パフォーマンス課題

瀬戸内国際芸術祭に大勢の観光客が訪れたのはどうしてか調べ、それをもとにして、瀬戸内のよさを積極的に情報発信するホームページをつくろう。

第2次

様々な情報ネットワークについて調べ、情報ネットワークの特性について理解することができる。 (4時間)

- ◎ 「生活、医療、防災、福祉、教育の事例として、それぞれ瀬戸内国際芸術祭におけるインターネットの利用、医療ネットワーク、防災ネットワーク、情報通信ケーブルでの在宅見守りシステム、図書館検索システムについて調べ、ネットワークを模式図にまとめる。
- ◎ お互いのネットワーク図を交流し、それぞれの特色を明らかにする。
- 情報ネットワークは、それぞれの用途に応じて、ネットワークの特性を生かして活用されている。
- 瀬戸内国際芸術祭は、当初の予想の3倍以上にもなるおよそ93万人の人々が瀬戸内の島々を訪れた。これは、情報ネットワークの力ともいわれている。

ノートの記述から、「調べたことを整理して、情報ネットワークのしくみを図にまとめることができたか」「情報ネットワークを有効に活用して公共サービスの向上に努めていることを理解できたか」を評価する。【技－②】【知－①】

第3次

瀬戸内国際芸術祭が成功した要因を分析して調べ、自分なりに根拠をもって説明することができる。 (2時間)

- ◎ 瀬戸内国際芸術祭が成功した要因について考える。
- 瀬戸内国際芸術祭が成功した要因の一つには、情報ネットワークの大きな力がある。
- 新聞やテレビ・ラジオなどのメディアも大きな役割を果たした。
- 口コミなどで訪れるお客さんも多い。また、リピーターが多いのも特徴である。
- 情報ネットワークの力だけでなく、島そのものや芸術に魅力があったことも成功の要因である。

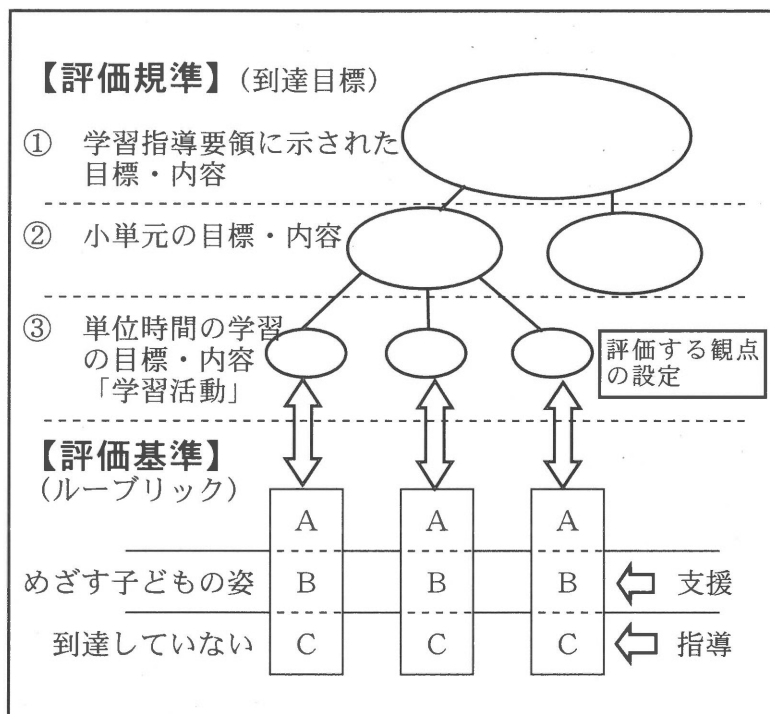
発言の内容や思考図から、「芸術祭に多くの人が訪れた理由を、これまで調べてきたことを相互に関連づけ、自分なりに根拠をもって説明できたか。」を評価する。

【関－②】【思－②】

- 放送や新聞などの情報産業が、国民に様々な情報を提供し、国民の多くがそれらを多方面で利用している。
- 情報ネットワークの働きが、公共サービスの利用のために、大いに活用されている。
- 情報化の進展が国民生活の向上や産業の発展に大きな影響を及ぼしており、情報の有効な活用が今後の社会にとって重要である。

(2) 学習活動と評価基準(ルーブリック)

また、必要に応じて単元の中での学習活動に即した評価基準を設定するとともに、それらを授業場面の中で、どのような評価方法により評価するのかを具体的に示すことが必要になってくる。特に、思考力・判断力・表現力の評価については、できる・できないというようなドメイン的な評価では、子どもの見取りはできず、それに対する指導も難しい。この時に必要になってくるのが評価基準(ルーブリック)である。子どもの思考の様相を予想し、それに対する指導を用意しておくことにより、結果としての評価ではなく、授業場面で子どもの思考力・判断力・表現力を伸ばそうとするものである。つまり、形成的な評価であり、過程としての評価である。



(3) 社会科ノートを生かした自己評価

自己調整を図っていくためには、自己評価を単元を通して行っていく必要がある。子どもたちが日常的に使っているノートで自己評価ができるよう、下の図のような評価カードの開発を行う。

自己評価で「自己調整」を図る(高学年用)

(例)

自己調整の過程	わたしの「すてき」カード	よくできた ◎	だいたいできた ○	もっとがんばる △
予見の段階	①目標設定	学習のめあてをもてた		
	②方略の計画	問題を解決する仕方の見通しをもてた		
	③興味	楽しく喜びをもって取り組めた		
	④自己効力感	自分のもっている力でやってのけられた		
	※各校でのめあて・観点			
	※コメント記入欄			
遂行・コントロールの段階	①注意の焦点化	めあてに向かって集中できた		
	②自己教示	自分でよい資料を選ぶことができた		
	③自己モニタリング	自分の思いや考え方をノートに表せた		
	④自己効力感	自分で考えたことがうまく進んでいる		
自己省察の段階	①自己評価	自分の考えを表し、主張できた		
	②協働	仲間とのかかわりが深まった		
	③創意	自分らしい課題を見つけ、調べられた		
	④自己効力感	まとめたことに満足できた		

〈自己評価カードを使用した具体例〉

① 単元「くらしを変える情報ネットワークの秘密」の評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
① 情報化した社会の様子に関心をもち、意欲的に調べている。 ② 社会の情報化の進展に関心をもち、情報を有効に活用しようとしている。	① 情報化した社会の様子について学習問題や予想、学習計画を考え、記述している。 ② 調べたことを相互に関連づけたり、情報の活用の仕方と芸術祭の入場者数の変化とを関連づけたりして考え、情報活用の方法について自分なりに根拠を挙げて説明している。	① 資料やインターネットを活用したり、聞き取り調査を行ったりして、情報化した社会の様子について必要な情報を集め、読み取っている。 ② 調べたことを整理して、図表や作品などにまとめている。	① 情報ネットワークを有効に活用して公共サービスの向上に努めている取組の様子を理解している。 ② 情報化の進展は、国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを理解している。

② 「再構成の学習」の過程における自己調整による自己評価

	①予見の段階 (問題づくり)	②遂行・意志的制御の段階 (課題追究)	③自己省察の段階 (論述)																								
社会科ノート	学習活動 ◎ 教科書から、情報ネットワークが生活や医療など様々な場面で使われていることをつかみ、学習計画を立てる。 【関一①】 ◎ PTA 携帯連絡網から、ネットワークの特性をつかむ。 子どもの自己評価	◎ 教科書の複数の事例について、それぞれのネットワークの特性を模式図にまとめる。 【技一②】 子どもの自己評価	◎ 瀬戸内国際芸術祭が成功した要因を情報ネットワークの点から考える。 【思一②】 子どもの自己評価																								
評価基準（ルーブリック）	<table border="1"> <tr> <td>3</td> <td>瀬戸内国際芸術祭に多くの人々が訪れた理由を情報ネットワークの視点からつかもうというめあてをもち、自分から学習計画を立て、話し合いに進んで参加できている。</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>学習のめあてはもっているが、計画が部分的にしか立てることができず、話し合いへの参加も十分ではない。</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>学習のめあてがしっかりつかめておらず、学習計画を立てることができない。話し合いにも参加することが難しい。</td> </tr> </table>	3	瀬戸内国際芸術祭に多くの人々が訪れた理由を情報ネットワークの視点からつかもうというめあてをもち、自分から学習計画を立て、話し合いに進んで参加できている。	2	学習のめあてはもっているが、計画が部分的にしか立てることができず、話し合いへの参加も十分ではない。	1	学習のめあてがしっかりつかめておらず、学習計画を立てることができない。話し合いにも参加することが難しい。	<table border="1"> <tr> <td>3</td> <td>教科書の1つ1つの事例について、その特性がはっきりするようにネットワーク図にまとめ、その図にあった説明文を書くことができる。</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>教科書の1つ1つの事例について、その特性がはっきりするようにネットワーク図にまとめているが、文章によって説明するのが難しい。または、いくつかの事例については、ネットワーク図の特性がはっきりしない。</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>教科書の事例を理解することが難しく、ネットワーク図を書くことが難しい。</td> </tr> </table>	3	教科書の1つ1つの事例について、その特性がはっきりするようにネットワーク図にまとめ、その図にあった説明文を書くことができる。	2	教科書の1つ1つの事例について、その特性がはっきりするようにネットワーク図にまとめているが、文章によって説明するのが難しい。または、いくつかの事例については、ネットワーク図の特性がはっきりしない。	1	教科書の事例を理解することが難しく、ネットワーク図を書くことが難しい。	<table border="1"> <tr> <td>3</td> <td>手がかりとなる基本的なデータに合わせて、学んできたそれぞれのメディアの特質を考へて、いろいろな組み合わせを考えながら、自分の論理を作り上げることができる。</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>手がかりとなる基本的なデータに合わせてはしているが、部分的にしか合っていないが、全体を通してみると、つながりが不十分である。</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>手がかりとなる基本的なデータの読み取りが不十分のため、データに合わせて理由を考えようとする意識が薄い。自分の思い込みで論理を展開している。</td> </tr> </table>	3	手がかりとなる基本的なデータに合わせて、学んできたそれぞれのメディアの特質を考へて、いろいろな組み合わせを考えながら、自分の論理を作り上げることができる。	2	手がかりとなる基本的なデータに合わせてはしているが、部分的にしか合っていないが、全体を通してみると、つながりが不十分である。	1	手がかりとなる基本的なデータの読み取りが不十分のため、データに合わせて理由を考えようとする意識が薄い。自分の思い込みで論理を展開している。						
3	瀬戸内国際芸術祭に多くの人々が訪れた理由を情報ネットワークの視点からつかもうというめあてをもち、自分から学習計画を立て、話し合いに進んで参加できている。																										
2	学習のめあてはもっているが、計画が部分的にしか立てることができず、話し合いへの参加も十分ではない。																										
1	学習のめあてがしっかりつかめておらず、学習計画を立てることができない。話し合いにも参加することが難しい。																										
3	教科書の1つ1つの事例について、その特性がはっきりするようにネットワーク図にまとめ、その図にあった説明文を書くことができる。																										
2	教科書の1つ1つの事例について、その特性がはっきりするようにネットワーク図にまとめているが、文章によって説明するのが難しい。または、いくつかの事例については、ネットワーク図の特性がはっきりしない。																										
1	教科書の事例を理解することが難しく、ネットワーク図を書くことが難しい。																										
3	手がかりとなる基本的なデータに合わせて、学んできたそれぞれのメディアの特質を考へて、いろいろな組み合わせを考えながら、自分の論理を作り上げることができる。																										
2	手がかりとなる基本的なデータに合わせてはしているが、部分的にしか合っていないが、全体を通してみると、つながりが不十分である。																										
1	手がかりとなる基本的なデータの読み取りが不十分のため、データに合わせて理由を考えようとする意識が薄い。自分の思い込みで論理を展開している。																										
対応	2：課題解決への見通しについて助言する。 1：学習の方向性について教師とともに考える。	2：教師に説明する体験を通して言語化を図る。 1：場面絵を活用してネットワーク図にまとめる。	2：大きな視点で考えてみるよう助言する。 1：教師に説明させることにより、理解を深める。																								
自己評価	<table border="1"> <tr> <td>学習のめあてをもてた</td> <td>◎</td> </tr> <tr> <td>問題を解決する仕方の見通しをもてた</td> <td>△</td> </tr> <tr> <td>楽しく喜びをもって取り組めた</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>自分のもっている力でやってのけられた</td> <td>○</td> </tr> </table>	学習のめあてをもてた	◎	問題を解決する仕方の見通しをもてた	△	楽しく喜びをもって取り組めた	○	自分のもっている力でやってのけられた	○	<table border="1"> <tr> <td>めあてに向かって集中できた</td> <td>◎</td> </tr> <tr> <td>自分でよい資料を選ぶことができた</td> <td>◎</td> </tr> <tr> <td>自分の思いや考え方をノートに表せた</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>自分で考えたことがうまく進んでいる</td> <td>△</td> </tr> </table>	めあてに向かって集中できた	◎	自分でよい資料を選ぶことができた	◎	自分の思いや考え方をノートに表せた	○	自分で考えたことがうまく進んでいる	△	<table border="1"> <tr> <td>自分の考えを表し、主張できた</td> <td>△</td> </tr> <tr> <td>仲間とのかかわりが深まった</td> <td>◎</td> </tr> <tr> <td>自分らしい課題を見つけ、調べられた</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>まとめたことに満足できた</td> <td>○</td> </tr> </table>	自分の考えを表し、主張できた	△	仲間とのかかわりが深まった	◎	自分らしい課題を見つけ、調べられた	○	まとめたことに満足できた	○
学習のめあてをもてた	◎																										
問題を解決する仕方の見通しをもてた	△																										
楽しく喜びをもって取り組めた	○																										
自分のもっている力でやってのけられた	○																										
めあてに向かって集中できた	◎																										
自分でよい資料を選ぶことができた	◎																										
自分の思いや考え方をノートに表せた	○																										
自分で考えたことがうまく進んでいる	△																										
自分の考えを表し、主張できた	△																										
仲間とのかかわりが深まった	◎																										
自分らしい課題を見つけ、調べられた	○																										
まとめたことに満足できた	○																										
対応	△に対して教師とともに解決の手順について考える。	△に対して何がうまくいっていないのか教師とともに考える。	△に対してグループなど小集団で発表させ、成功体験を積ませる。																								

6 学校評価につなぐ学習評価

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」においては、「各学校における学習評価は、学習指導の改善や学校における教育課程全体の改善に向けた取組と効果的に結び付け、学習指導に係る PDCA サイクルの中で適切に実施されることが重要である」と述べられている。

報告において PDCA サイクルが強調された背景には、学習評価において妥当性・信頼性を確保するという課題、さらには教師の負担感の問題が指摘されている現状がある。では、どのように取り組めばよいのだろうか。次に例を示す。

Plan の段階	1 年後に具体的にどのような資料によって教育課程改善の成果を評価するのか計画する。「思考力・判断力・表現力」が課題なのであれば、それを発揮させるような課題(パフォーマンス課題)を具体的に計画しておく。できれば、事前に児童の反応を想定したループリックを作成しておけば、指導に生かすことができる。
Do の段階	教育活動を実施しつつ、成果を示す資料を収集しておく。授業の際、児童の反応を想定したループリックに基づき、子どもの反応を見取することで、指導に生かすことができる。
Check の段階	どの程度のパフォーマンスが行われていれば、満足できるのかを示すループリック(評価指標)づくりに協同で取り組むことが有効である。このことにより、職員間で付けたい力が共通理解され、評価の妥当性・信頼性が高まる。 ループリックを児童にも自己評価の指針として示すことで、学習を改善することかも期待できる。
Action の段階	Check の段階で出された知見を生かしつつ、さらなる指導の充実や指導計画の改善を図る。

以上のような過程をふむことによって、児童の学習評価は、そのまま学校における教育活動全体の改善につながる学校評価の枠組みの中核に位置付くのである。

参考文献

- 「授業改革と学力評価」 北尾 倫彦 図書文化社 2008 年
「子どもの思考力」 滝沢武久 岩波書店 1984 年
「考える・まとめる・表現する」 大庭・コティ・さち子 NTT出版 2009 年
「学ぶ意欲の心理学」 市川伸一 PHP新書 2001 年
「学習心理学」 辰野千寿 教育出版 1994 年
「社会科ノート」による思考力の育成 香社研 東洋館出版社 2008 年
「社会認識の系統からみた社会科新単元構成(試案)」 香社研 2008 年
「自己調整学習の理論」 バリー・J・ジーママン, デイル・H・ジャンク編著 塚野州一編訳
北大路書房 2006 年
「自己調整学習の実践」 バリー・J・ジーママン, デイル・H・ジャンク編著 塚野州一編訳
北大路書房 2007 年
「自己調整学習と動機づけ」 バリー・J・ジーママン, デイル・H・ジャンク編著 塚野州一編訳
北大路書房 2009 年
「自己調整学習の成立過程」 伊藤崇達 北大路書房 2009 年
その他

本年度総括 さ・東社研

研究主題

思考力の育成をめざした地域プランの開発
～指導に生かせる評価～

1 研究主題について

本部会は、「思考力・判断力・表現力の育成」という観点から社会科学習を見直す。特に、知識の再構成を大切に学習を考えていく上で、地域教材と教科書教材をうまく組み合わせて地域プランを作成して、思考力の育成をめざそうと考え、テーマを「思考力の育成をめざした地域プランの開発」とした。

地域プランとは、さぬき市、東かがわ市独自の地域教材を教科書教材とともに単元の中に位置づけて思考の育成をめざしたものである。

サブテーマを「指導に生かせる評価」としたのは、児童のつまずきを早期に発見するための形成的評価と成績に反映させるために評価規準と照合性のある総括的評価との関係を確認するなど指導に生かせる評価を共通理解することをねらいとするためである。

〈本年度の具体的な研究内容〉

- (1) 教材開発について
- (2) 資料活用と児童の表現活動の関わり（言語活動・ノート作り等）
- (3) 学習評価について

2 研究の実践

- (1) 第1回研究会 6月23日 会場 さぬき市立長尾小学校

- ① 研究授業 5年 単元名 米づくりのさかんな庄内平野

授業者 さぬき市立長尾小学校 教諭 和田 千幸

本時の主張点

- ア 学習意欲を高めるために単元構成を工夫する。
- イ 問いを追究するために資料を活用する能力を育成する。キーワードは機械化と農作業の時間対策。
- ウ 地元の農事ごよみと庄内地方の農事ごよみを比較し思考を深めさせる。
- エ 学習を通して学んだことをもとに、食生活と第一次産業の重要な情報を発信させる。

- ② 研究討議

ア 教材開発について

- (ア) 児童の認識を共通理解させるためにも長尾地区の米づくりとより関連させることが大切である。
- (イ) バケツ栽培を行い、米づくりの悩みを体感したり、ふれあい市場で米の生産地を調べたりすることが教材開発につながる。
- (ウ) 教材開発の視点を生産者から消費者へ変更することによって、児童の意識がスムーズに流れた。

イ 資料活用と児童活動の関わりについて

- (ア) 国語科とも関連を図り、キーワードを的確にまとめながら資料を整理するとよい。
- (イ) 根拠をあげて書くことが大切。資料の丸写しは知識にならない。
- (ウ) グループで交流することにより、新しい視点が生まれたのはよかった。

ウ 学習評価について

- (ア) 単元の中で、いつ、どの観点で評価するかはこれからの研究課題である。学習指導要領との関連や評価規準との互換性も追究していく必要がある。

- ③ 指導 さぬき市立造田小学校 校長 三井 重彰

- ア 社会科は資料活用の工夫や魅力的な授業展開が必要。それを日常的に行う方法にノート作りがある。
- イ 間接体験や資料をふまえて授業を構成することがあり、本時は資料の活用の仕方がポイントであった。
- ウ 表現と思考を一体化させるためには工夫された発問が重要である。
- エ 本時には、児童の豊かな発想があった。日常での発問が生かされている。

オ 統計資料と本時のめあてを関連づけて、思考の再構成を行う能力の育成。

カ 表現力はいつ育てるのか。授業の中で育てることが大切である。

キ 評価は学習内容に則したものであり、キーワードと関連づけられていたら◎と基準を設ける。

(2) 第2回研究会 7月22日 会場 さぬき市立造田小学校

学習指導に生きる評価の工夫を研修するため、次の活動を行った。

① 講話 「社会科学習における評価の在り方」 鳴門教育大学講師 井上 奈穂

② 学習指導に生きる評価の工夫 提案者 さぬき市立長尾小学校 教諭 和田 千幸

児童の表現物を使って、どの表現がどのような評価につながるか実際に行い、評価基準を定める研修を行った。

(3) 第3回研究会 12月1日 会場 東かがわ市立三本松小学校

① 研究授業 3年 単元名 「古い道具とむかしの暮らし」

授業者 東かがわ市立三本松小学校 教諭 白澤 一修

本時の主張点

ア 教科書にある基本資料ではなく、他社の教科書に掲載されている基本資料を使う。その理由としては時代が移り変わり、祖父母の時代の古い道具と実態とのギャップを無くす必要がある。

イ ノートをワークシート化することにより学習の視点を明確にする。

ウ 大画面に基本資料を提示し、児童の手元にも配布する事でどの児童にも学習参加の意欲を持たせる。

エ 歴史民俗資料館とのコラボにより資料選別や提示方法、体験学習の内容において幅広い活動をさせる。

オ 教室内での古い道具の展示場を作り、古い道具に興味を持たせ、歴史学習へのスムーズな導入を図る。

② 研究討議

ア 教材開発について

(ア) 人々の生活の様子が見える教材であった。

(イ) 具体物を展示・掲示していて効果的だった。

(ウ) 歴史民俗資料館の活用については、今後も各校が効果的に使えるよう情報交換を行う。

(エ) 廊下等に本物の道具があるので、児童もすぐに名前が分かった。

(オ) 道具が開発されてきた理由を考えさせる発問は難しい。ねらいと児童の反応にズレがあったので再考していく必要がある。

イ 資料活用と児童活動の関わりについて

(ア) 子どもたちが全員体験できる道具を選択するのが大切。衣・食・住のカテゴリーに分けていたが洗濯板を使った洗濯の体験は衣グループだけに効果があると思われる。

(イ) 昔の道具の見学だけでなく、体験することにより思考が明確になる。

(ウ) 資料から石鹸を見つけ出すことが出来たのは、洗濯の体験があったおかげである。

ウ 学習評価について

(ア) 目標と評価にズレがある。道具の学習からくらしの違いにはせまりにくい。そこには実際に使っていた人への聞き取りが必要である。その内容を形成的評価して、児童の学習経過を観察してはどうか。

(イ) ノートの活用をもっとシンプルにしてはどうか。3年生の発達段階から考えて分かりやすさが大切。

自由に書かせると書けない子が出てくるので、今回のようにワークシート型が良いのではないか。

③ 指導 東かがわ市立丹生小学校 教頭 橋本 義人

ア 洗濯板の溝の方向で使い方が違う。そのような知恵が道具にはあるので、その視点に気付くように展開していくことが本単元のねらいとなる。

イ 基本資料を他の教科書から出してきたことは、教材研究という点で評価できる。児童の実態に合わせて、より効果的な資料を提示することが大切である。

3 今後の課題

評価を学習に生かす（パフォーマンス評価）の具現化。

若年教員の指導力向上。

本年度総括 高松市社研

報告者 高松市立香南小学校 黒川浩一

1 研究主題

「社会科ノート」による思考力の育成を図る

—子どもの学習意欲を大切に、読解力と豊かな言語活動の展開による、日々の授業実践の充実を目指して—

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

本年度から新学習指導要領が全面実施された。新学習指導要領では、「知識基盤時代」において、ますます重要となる「生きる力」を育てるという理念が継承され、それを支える「確かな学力」「豊かな心」「健やかな身体」の調和が重視された。

教育内容の主な改善としては、「言語活動の充実」「伝統や文化に関する教育の充実」「体験活動の充実」等が挙げられ、社会科教育を考えていく上で重要な課題となっている。こうしたことをふまえ、「伝統文化」「公共性・規範意識」「経済（金融）教育」「法教育」等の学習が指導計画の中に系統立てて位置づけられていく必要がある。

実際の授業においても、児童にきちんと身につけさせたい基礎基本の内容や事項を見極めて日常的に社会科の本質の授業ができるよう、教科書を活用した授業改善が求められている。

(2) 研究活動

- ① 「指導と評価の計画」の作成
- ② 子どもの学習意欲をもとにした学習計画と再構成を図る学習の開発
- ③ 教材の本質を見極め、教科書を活用した学習材の開発
- ④ 読解力の育成を図り、思考力、表現力を育てる言語活動の充実を目指す
- ⑤ 社会科ノートを通した自己評価力の育成
- ⑥ 社会科ノートを通して家庭との連携を図り、家庭学習を生かした自学自習の態度の育成

3 研究実践について

第1回定例研修会 平成23年 6月16日（木）

第2回定例研修会 平成23年11月24日（木）

(1) 東ブロックの実践

4年「水はどこから」（高松市立木太小学校 教諭 柏 徹哉）

- ① 現状を時間軸で分析することで、将来予想につなげる
高松市全体の給水エリアマップをそのまま教材として使用するのではなく、今の状態になった過程を分析することで理解を深め、それを根拠に将来予想につなげた。
- ② 家庭へ伝えるためのワンペーパーポートフォリオによって自己効力感を育てる
自分の伸びを確認するとともに、家庭へも子どもの学習の過程や伸びを知らせるためにワンペーパーポートフォリオの形を取り、家の人のコメント（他者評価）を書く欄を設定した。
- ③ 教科書分析による教材の構造化
新しい教科書で内容が多くなってきているなか、教科書を分析し、何をどう教えていくのか明確にした。その結果、基底の内容、友達と交流し練っていくところ、発展の内容の3つに分けられた。

4年「きょう土を開く」（高松市立古高松小学校 教諭 國方 歳子）

- ① 自らの問いをもとにした課題作りの工夫
学習を深め、主体的に取り組ませるためには、より具体的な疑問をもたせ、新たな発見をさせることが大切である。そのため、自分の知っている人・もの・ことをもとに作成した「高松ふるさと歴史マップ」「高松市歴史年表」から単元全体を見通した学習問題（パフォーマンス課題）をつくり、追究する具体的な課題を明らかにした。
- ② 社会的なものの見方、考え方を身につける
「高松ふるさと歴史マップ」から地理的な横の広がりや、「高松市歴史年表」から縦の時系列をとらえ、縦と横をつないでいく社会的なものの見方・考え方を育てる。
また、自分たちが住む古高松地域を支えている人の思いや願い、苦心に気づかせる

ことで地域の一員としての生き方についても考える機会にした。

③ 学び合いにより思考力を深める

一斉、グループでの学び合いの形態を臨機応変に取り入れ、調べたことを自分の考えとなる根拠をもとに発表することを意識させることで、友だちの考えのよさや違いについて気づく力を養うことをねらった。

(2) 西ブロックの実践

4年「水はどこから」 (高松市立香西小学校 教諭 浅井 由布子)

① 習得を目標とする基礎・基本事項をおさえる学習

水の確保や関係機関の工夫や努力にはどういったことがあるかということを学習の前にもっていた知識と新たに学習した知識を再構成する学習を展開した。

② 根拠をもとに伝えられる思考力を育てる

児童の思考力育成のために、資料をもとに根拠を明らかにした話し合いを取り入れ、違う考えをもつ相手に自分の考えをうまく伝えられるようにした。

5年「情報化した社会とわたしたちの生活」 (高松市立一宮小学校 教諭 瀧 義幸)

① 地域教材を取り入れて子どもの学習意欲を高める

地域教材として一宮の台風情報ネットワークを取り入れることで、児童が身近なものとしてとらえるとともに、実際に足を運んで調べることも可能にした。

② 全国との比較から情報ネットワークのよさと課題を浮き彫りにする

気象庁をトップとする一宮の台風情報ネットワークも数十年比べると飛躍的に進歩している。しかし、いくらシステムが整ってもその情報を有効に生かすのは人と人とのつながりであることを捉えることができた。

(3) 南ブロックの実践

4年「水はどこから」 (高松市立仏生山小学校 教諭 木村 舞)

① 習得から探求へと意欲を高める単元構成の工夫

自分の考えをしっかりと持つ時間を確保した上で交流へとつなげる。そうすることでお互いに基礎・基本の事項を確認し合える。また、自分だけの表現物「水ブック」を作成するという課題意識を持つことで主体的に調べていこうと意欲が高まった。

② 資料の読み取りから思考力・表現力を育てる

高松市の資料をもとに浄水場の仕組みを図に表す。さらに、働く人々や管理室・配水コントロールセンターの役割をつけ加えていくことで計画的・協力的に安全できれいな水を供給していることに気づくよう工夫した。

5年「わたしたちの生活と工業」 (高松市立多肥小学校 教諭 靄羽 美緒)

① 授業像による学級づくり

本学級の児童は、授業中は、意見を言い合い、互いを認め合うことを目標にしている。交流に当たっては、文章表現に着目したりエンカウンター法によって話し合ったりすることで思考を深め、自ら学びを再構成できるように配慮した。

② 「伝え合う力の育成」を目指して

「伝えたい、話したいと感じる環境をつくる」「自分の考えを明確にする」を教師が意識して指導することにより、自信を持って発言したり友達の考えや意見とつないで発言したりできるようになった。

4 本年度の成果

(1) 単元の最初に、現在の社会の問題からその単元全体を貫く「パフォーマンス課題」を設定し目的意識をもって学習を進めることができた。そのため、各自で思考を深めるために操作をしたり、必要な情報を集めたりするノート活用の工夫ができた。

(2) 各学年の発達段階に合わせて年表、地図、カード等自分に必要な情報をきちんと読み取って思考を高めたり表現物に生かしたりする学習が展開できた。

5 本年度の課題(来年度の方向性)

(1) 教科書の内容が増え時数の確保が難しくなっている。本当に社会科の内容として子どもに身につけさせなければならない基礎基本の事項や内容を洗い出し、教科書を活用した指導の計画を作っていく必要がある。

(2) 24年度の浅野大会さらには28年度の全国大会を見据えていく必要がある。社会の一員としていかに生きていくのかという人間知も含めた社会認識を通して社会参画につなぐ学習の展開を研究していく方向である。

本年度総括 小豆社研

報告者 土庄町立湊崎小学校 笠井誉子

1 研究主題

基礎・基本の確実な定着とその発展を図る学習の展開
～基礎・基本の内容を習得し、思考力を育てる社会科学学習の在り方～

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

平成20年度3月に学習指導要領が改訂され、平成21年度から2年間の移行期を経て本年度より全面実施された。教育基本法や学校教育法等の改正を踏まえ、「生きる力」をはぐくむという理念の継承と、その具体的な手立てを確立し、子どもたち一人一人が習得した知識や技能をしっかりと活用できる力を育成するという、新しい教育の創造でもある。

そこで、この2つの柱を受け、社会科部会では、「基礎・基本の確実な定着とその発展を図る学習の展開」をテーマとして取り組むこととし、その中で「基礎・基本の内容の習得」と「思考力の育成」の学習における指導の充実を図っていくことにした。

社会科の授業を振り返って見たとき、「事実を調べて、事実をまとめて、事実を発表する」だけの調べ学習・問題解決学習もどきの学習では学力低下を招きかねない。社会的事象との関わりを通じて、ある観点に沿って情報を集め、整理して、自分なりの解釈をする「自ら学び、考え深める社会科学学習」を目指していきたいと考えた。そして、知識・技能のみならず、意欲、思考力、判断力、表現力等を含めた「基礎・基本」の定着を図るための学習を構築し、その上で、社会的事象との自らの関わり方を考える力を育てていくことを目指した。

(2) 研究活動

日 時	活 動	内 容
平成23年 4月22日(金) 5月26日(木)	事業計画 第1回授業研究	組織づくり・研究テーマ・年間計画立案 第4学年「住みよい暮らしをつくる」 授業者 土庄町立湊崎小学校 黒川幸宣教諭
9月27日(火)	第2回授業研究	第3学年「はたらく人とわたしたちの暮らし」 授業者 小豆島町立苗羽小学校 高木浩彰教諭
11月12日(土)	香社研定例会	提案発表 提案者 土庄町立湊崎小学校 黒川幸宣教諭
平成24年 2月18日(土)	研究フォーラム2011	実践交流にてパネル発表 提案者 小豆島町立苗羽小学校 高木浩彰教諭

3 研究実践について

※ 第2回授業研究 第3学年「はたらく人とわたしたちの暮らし」から抜粋

(1) 単元構成(◎：各次の目標、○中心となる活動や内容)

第1次	小豆島町の醤油造りについて、工場を見学して調べようとする意欲をもち、学習の計画を立てる。 ◎ 醬の郷マップを見て、内海には醤油工場がどれくらい多いかをつかむことができる。 ◎ 内海にはたくさんの醤油工場があることを理解し、醤油について調べる方法を考えることができる。 ○ 身近な地域では、どんなものが工場で作られているかを考える。 ○ 醤油工場は地域の人たちの働く場所になっていることを理解する。 ○ 小豆島が日本有数の醤油の産地であることを資料をもとに理解する。 ○ 小豆島ではたくさんの醤油工場があり、生産量も多い理由を予想する。
第2次	実際に醤油工場に見学に行き調べる。 ◎ 醤油工場について調べたいことを話し合い、見学の計画を立てることができる。 ◎ 工場を見学して、各観点ごとに工場の仕事や働く人々の様子を調べ、醤油の造り方を知ることができる。 ◎ 工場を見学して、他地域との関わりを見つけすることができる。 ○ 原材料の仕入れ、醤油の製造過程、働く人の様子、販売の方法などの見学する観点を決める。 ○ 工場の人に質問したいことを考えて、ワークシートにまとめる。 ○ 醤油工場の仕事の様子について、予想を立てる。 ○ 事前に考えていた疑問を工場の人に質問する。
第3次	地域の工場の生産に関わる仕事を調べることを通して分かったことをまとめよう。 ◎ 醤油は大豆と小麦、塩水と酵母菌等の複数の菌による発酵によって約1年かけて仕込ん

	で造るという過程を理解することができる。 ◎ 小豆島島内だけでなく、全国や世界から材料を集めていることや、製品の出荷場所も全国や世界まで広がっていることを理解することができる。 ◎ 各観点ごとのグループで、工場見学を通して見つけた工夫をまとめることができる。 ◎ 工場見学で調べたことをもとに工場で働く人々や醤油造りの工夫や願いを考え、自分なりにまとめることができる。 ○ それぞれの観点で見学して調べ、分かったことや感じたことをメモをもとにグループごとにまとめる。 ○ 原材料、造り方、働く人の様子、販売に分けて分かったことをまとめる。 ○ 工場見学をして新たに疑問に思ったことや知りたいと思ったことを資料や工場のビデオ等を活用して調べる。 ○ 調べてきたことをもとに、おいしい醤油の秘密を考えることで、工場で働く人の工夫や願いを考える。 ○ 各グループで調べたおいしい醤油を造る秘密を交流して伝え合い、個人でまとめる。
第4次	<u>醤油の郷に観光に来る人たちに小豆島の醤油をPRするポスターを作ろう。</u> ◎ 醤油産業が自分たちの地域に根ざしており、自分たちの生活に使われていることを理解する。 ◎ 調べたことを整理して、ポスターに絵や図を使って分かりやすく表現することができる。 ○ 小豆島の醤油のことをより知ってもらうために、どんな内容にすればよいかを考える。 ○ 調べたことや聞いたことの中から、何を載せるかを選ぶ。
到達度 評価	苗羽小学校周辺には、多くの醤油工場が立ち並んでおり、それらの醤油産業は自分たちの地域の産業として根ざし、生活と深く関わっていることをとらえることができる。さらに、工場見学を通して、消費者のニーズに応えるために、さまざまな工夫や努力をしていることをとらえることができる。また、生産物の出荷や工場の原材料仕入れを通して、国内の他地域や外国とも関わりがあるということを理解できる。
発展	複数の醤油工場に見学に行き、いろいろな生産の様子や工夫を調べよう。

(2) 討議内容

- ・ 小豆島の特徴として、「食」と「工場」がつながっているととらえることができていた。
- ・ 発表方法にポスターセッションを取り入れ、それを聞いてまとめるときに、虫食いのワークシートを用いた。初めはまとめられなくても、書かれてある秘密を書き写すことも大事である。そこから、だんだん自分の言葉でまとめられる力を身につけていけるようにしていけばよい。
- ・ 体験に基づく表現活動ができていた。
- ・ 本時を一つの単元として考えるのであれば、落ち着いて書く時間もあれば、交流する時間があってもよかった。
- ・ 歴史的・地理的・公民的な広がり、環境・気候・風土の観点においても、第3学年の発達段階にあっていたと思う。
- ・ 醤油に関しては小豆島の地場産業だから、苗羽だけでなく小豆全体で調べていけるようなワークシートを作成していけばよいと思う。
- ・ 児童は歴史的なことよりも、工場のほうがどうなっているのかが気になっていると思うが、歴史的なことも社会科だけではなく総合的な学習の時間でも取り扱っていくようにする。

4 本年度の成果

提案者と他の部会員相互による検討を重ねた授業研究によって、公民的資質を育てるための学習の構造や展開について実践・検証する研修を進めることができた。

「地元のごみ処理に関わる問題」や「校区にある工場の仕事」といった地域素材を取り上げるとともに、学習した内容をもとに地域に働きかける活動を取り入れることで、児童は自ら進んで学習に取り組むことができた。

表現物の記載事項を決める話し合いやポスターセッションによって、児童の間で知識の再構成を行う場を設けることができた。

5 本年度の課題（来年度の方向性）

児童が自身の言葉を使って習得した内容を再構築する思考活動を、どのように設定するか。また、思考活動における評価規準の設定を、どのように行うか。

単元全体を通して、児童が学習内容や自身の思考過程を振り返ることのできるノートやワークシートを、どのように構成するか。

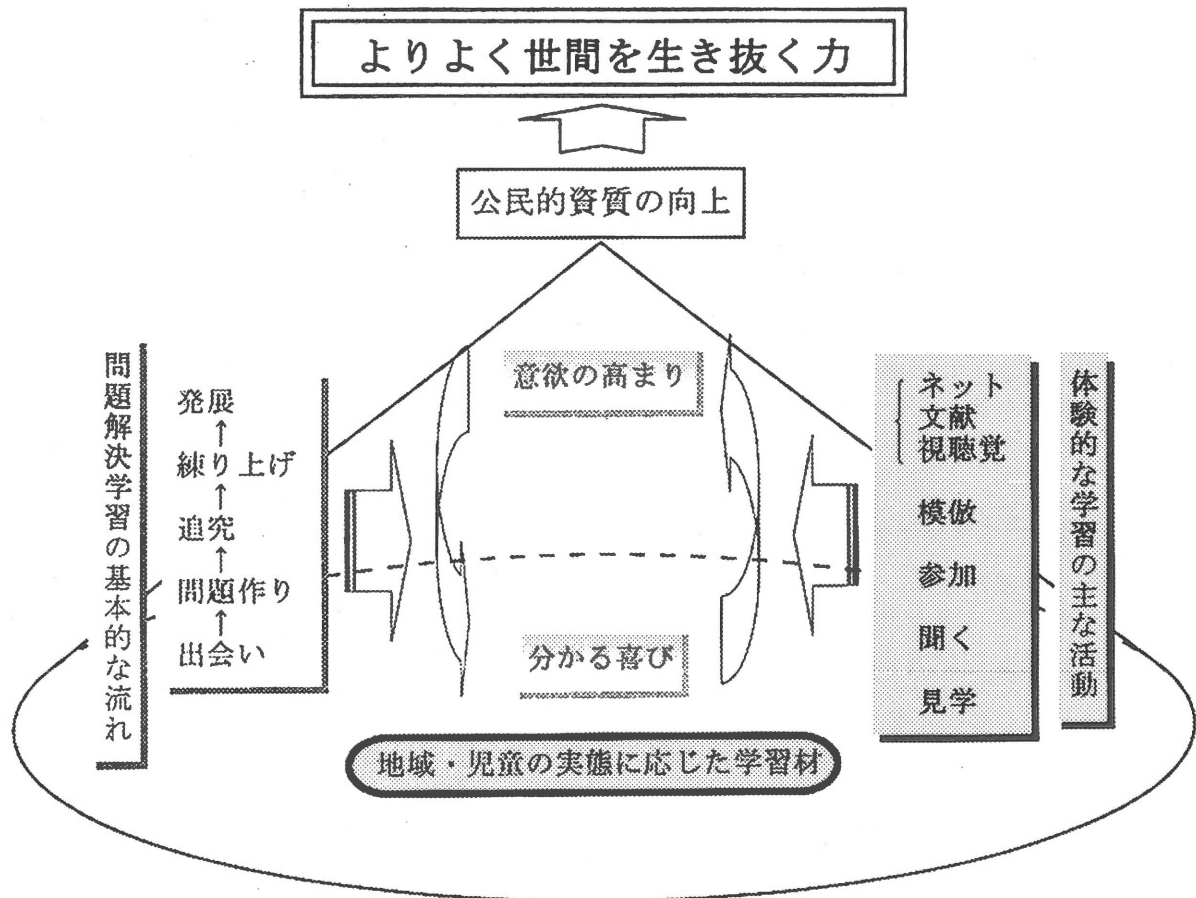
本年度総括 坂出・綾歌社研

報告者 坂出市立東部小学校 福家寿夫

1 研究主題

分かる喜びを実感できる社会科学習の展開
－体験的な学習・問題解決的な学習の充実を通して－

2 本年度の研究の概要



(1) 研究主題について

体験的な学習は自然体験，社会体験，生活経験が不足し，人とのかかわる力が不足している現代の子どもたちにとって，新鮮で楽しさの期待できる学習になる。これは学習する意欲の源であり，学ぶ力の源でもある。

そして，問題解決的な活動を取り入れた学習は，課題を追究していく中で，一人一人の疑問が解決したときに「そうか，そういうことか。」「よし，できた。分かった。」という喜びを感じることができる。

体験的な学習や問題解決的な学習を充実させることにより学ぶ意欲を高め，思考力，判断力を育てることを目指している。

坂・綾社研で目指す児童像

- 社会的事象に驚きや疑問を感じ，意欲的に追究することができる児童
- 既習の基礎・基本の事柄や内容を使って，話し合ったり発表したりすることができる児童
- 調べたことを根拠にして，比較したり，様々な立場から考えることができる児童
- 問題解決に必要な資料を収集・活用するとともに，考えをノートにまとめることができる児童

(2) 研究活動

日にち	場所	研修会名	内 容	参加者
3月下旬	坂・坂出小	事前検討会	23年度の役割分担・計画	研究部
4月13日(水)		坂綾小研総会	23年度の組織作り 夏季研の役割分担	坂綾全員
6月14日(火)	坂・加茂小	坂綾小研教科研	研究授業Ⅰ	坂綾全員
6月15日(火)	綾・宇多津北小	定例会事前研	定例会事前打ち合わせ	研究部
6月18日(土)	綾・宇多津北小	香社研定例会	提案発表	香小研社会科部員
6月17・24・7月1日(金)	坂・坂出小 他	夏季研分科会事前検討会	夏季研分科会の事前打ち合わせ	研究部
11月4日(金)	綾・綾上小	坂綾小研教科研	研究授業Ⅱ	坂綾全員
12月22日(木)	坂・坂出小	研究フォーラム事前検討会	研究フォーラムの役割分担等	研究部
1月20日(金)	坂・坂出小	研究フォーラム事前検討会	研究フォーラム事前打ち合わせ	坂綾全員
2月18日(土)	坂出附属小	研究フォーラム	研究フォーラム発表	香小研社会科部員

3 研究の実践について

授業研究Ⅰでは、「なぜ庄内平野ではたくさんの米がとれるのか。」という学習問題で授業を展開した。課題解決のために、総合学習で取り組んだ米作りの体験や、地域の米作りの特徴を手がかりとした。授業の終末では、自分たちの住む地域にはない条件に庄内平野の季節風があることを提示し、児童に新たな学習意欲がわき、さらに次時の学習の充実が期待されるものとなった。

授業研究Ⅱでは、「自動車の部品はどのように作られているだろう。」という学習問題で授業を展開した。導入では、東日本大震災後に自動車生産がストップした事実から、自動車の部品の流れを意識させた。また、シート工場の方をゲストティーチャーに招き、疑問に思ったことを質問する場を設けた。実際に話を聞くことで正確に作る工夫や届け方の工夫に気づかせることができた。

4 本年度の成果

(1) 資料提示の工夫ができた

「なぜだろう。」「どうしてだろう。」という思いにさせるような資料を提示するよう心がけた。授業を展開していく中では、追究意欲を持続させるような補助資料を提示したり、五感に訴えるような資料や体験活動を取り入れるようにした。まとめの段階には課題を解決するための資料や新たな課題とさらなる意欲が生まれるための資料を提示するようにした。

(2) 体験の取り入れ方の工夫ができた

体験を取り入れることで意欲を高め、主体的な学習ができるようになる。しかし、児童に問題意識がなければ、体験を取り入れても何も残らない。体験前後の手だてを用意し、体験したことから学習が始まったり、体験を単元展開の途中における問題解決に使ったりするなどするよう心がけた。

(3) ノートの充実の工夫ができた

練り上げる段階でノートを使った。ノートを使って、自分が分かったことについて他の人に知らせようにした。知らせた人から自分が認められることで、自信がもて、一層考えが練り上っていくことが感じられた。

交流し、互いに考えたことを認め合うことで、個人の認識が集団の共有認識へと高まる。

5 本年度の課題（来年度の方向性）

坂出・綾歌社研ではノートを「集団と個の関わり」の通信手段として使う研究を進めてきた。「新・ノート作り10箇条」「スケッチブックのノート」「横に使ったノート」など各自で工夫がされ、社会科を研究教科にしていない先生方にも広まりつつある。

来年度は目指す児童像2番目にある「既習の基礎・基本の事項や内容を使って、話し合ったり発表したりすることができる児童」を育てることに力を入れて行こうと考えている。

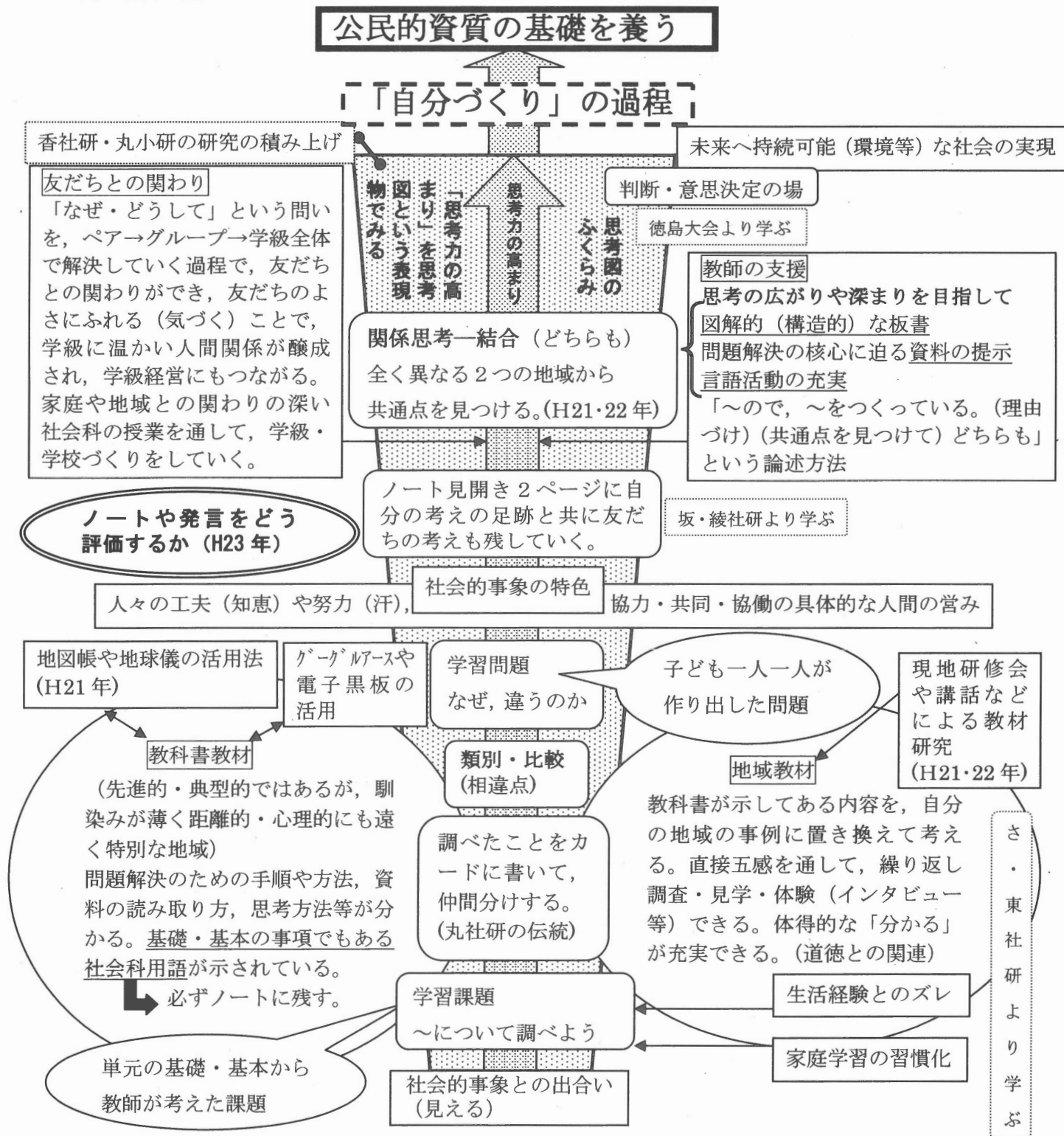
今後さらに社会科部会の研究が活発になり、参加者に「参考になった。参加して良かった」と思われるような有意義な研究になるよう内容と方法を考えていく。

1 研究主題

社会科部会「自分づくりの社会科学習」
—基礎・基本の定着と自ら学ぶ問題解決能力の育成を求めて—

2 本年度の研究の概要

(1) 研究主題について



(2) 研究活動

日時	会場	活動内容
4月13日	富熊小	研究組織づくり、研究主題決定、年間計画作成
5月27日	飯山北小	事前勉強会 5年「気候の特色を生かした人々の暮らしー十勝の農業ー」
6月2日	飯山北小	事前研修会 5年「気候の特色を生かした人々の暮らしー十勝の農業ー」
6月8日	飯山北小	研究授業 5年「気候の特色を生かした人々の暮らしー十勝の農業ー」 授業者 飯山北小 教諭 櫻井道芳・指導者 附属高松小 教諭 河田祥司
7月26日	三豊市文化会館マリンウェーブ	ワークショップ 提案者 飯山北小 教諭 櫻井道芳・指導者 高松市教委 指導主事 岡本英孝
9月9日	城乾小	香社研定例会提案事前勉強会 6年「天皇中心の国づくり」
9月30日	城乾小	香社研定例会提案事前勉強会 6年「天皇中心の国づくり」
10月15日	岡田コミュニティセンター	香社研定例会 6年「天皇中心の国づくり」 提案者 城乾小 教諭 西川由華 指導者 西部教育事務所 主任指導主事 森昭二・香社研 OB 山崎敏和
12月7日	城北小	実践交流 「評価のあり方」 指導者 附属高松小 教諭 河田祥司
12月14日	垂水小	平成25年度香小研夏季研修会（丸亀担当）についての勉強会
1月17日	城西小	平成25年度香小研夏季研修会（丸亀担当）についての勉強会

3 研究実践について

(1) 授業研究（5年生「気候の特色を生かした人々の暮らしー十勝の農業ー」）

本年度は「何を児童にとらえさせるのか」「授業の終末の段階で児童がまとめとして書くべき内容は何か」をより明確にするために評価規準と評価基準を明文化して授業に臨むようにした。

5年生の実践の場合、本時の目標は『資料から十勝地方でじゃがいも作りが盛んな理由について、気候条件と土地条件の2つの視点から考えをまとめることができる』であった。つまり、じゃがいも作りが盛んになるには、気候条件、土地条件のどちらかだけでは不十分ということなので、授業者は押さえるべきポイントを明確にし、以下のように評価規準と評価基準を設定して授業に臨んだ。

<評価規準>

学習内容	関	思	技	知	評価規準
十勝地方で農業が盛んな理由を気候条件と土地条件の2つの視点から資料を読み取り、十勝の農業についてまとめる。		◎	○		資料から十勝地方でじゃがいも作りが盛んな理由を気候条件や土地条件につなげて考え、まとめることができる。

<評価基準>

A 十分満足	B おおむね満足	C 不十分
十勝地方でじゃがいも作りが盛んな理由について気候条件と土地条件を関連付けて記述できている。	十勝地方でじゃがいも作りが盛んな理由について気候条件か土地条件どちらか一方の視点で記述している（2つの視点であっても関連付けられていないものも含む）。	知識の羅列、もしくは感想のみの記述しか見られない。

(2) 実践交流（評価のあり方）

丸小研社会科部会での実践（気候の特色を生かした人々の暮らしー十勝の農業ー5年）や香社研定例研修会での実践（天皇中心の国づくり 6年）での評価の提案をもとにして、部員各々が児童の表現物の評価について実践し、まとめたもので交流した。学年ごとにグループを作り、全員が同じ観点から実践交流し、話し合った内容をKJ法で整理した。指導者からは、言語で表現されたもの（例：まとめ文）だけで評価を行うようになるから、言語力を社会科だけでなく教育課程全体で育てていかなければならないとの指導があった。

4 本年度の成果

- 評価に視点を置いて研修したことで、「評価から授業を見直す」視点が出た。
- 丸小研社会科部会の研究主題・副主題「自分づくりの社会科学習ー基礎・基本の定着と問題解決能力の育成ー」を部員各々が見直す機会を設けたことで、取り組むべき方向性が見えてきた。

5 本年度の課題

- 県の研究主題『社会科ノート』による思考力の育成と丸小研社会科部会の研究主題との関連を図りながら、実践に取り組む必要がある。
- 「自分づくり」の過程は、社会科の究極の目標である公民的資質の基礎を養うことである。それに関わる「判断・意思決定の場」に視点を置いた研究が必要になる。

本年度総括 三観社研

報告者 観音寺市立観音寺南小学校 出濱大資

1. 研究主題

個が育ち、生きる社会科学学習の創造～考える力を育てる社会科学学習をめざして～

2. 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

社会科の目標は、「公民的資質の基礎を養う」ことである。三観社研では、2000年度から公民的資質の基礎を養うとは、「経験」に照らし合わせながら、自分なりにものごとを考え実践することのできる意志決定の主体を育成することだと考えてきた。他者との関わりの中で考えを出し合い、社会的な概念を磨き合う事を個が生きている状態ととらえ、授業でその姿を模索してきた。個が育ち、生きる社会科をめざすことは、本質的で普遍的課題であるにとらえ、本年度もその課題を継続研究してきた。

(2) 研究活動（研究の視点）

① 単元観の確立をめざす教材研究

○学習指導要領・教科書の分析から単元観が作られる過程

② 「切実性のある問い」の研究

○切実性のある問いとは ○問いの分類と単元構成

3. 研究実践について

(1) 香小研夏季研修会での2学期単元の提案

香小研夏季研修会では、三観社研の考える社会科の授業(2学期教材)について提案した。

夏季研修会で提案した実践

第3学年提案「農家の仕事」

テーマ「切実性のある問いを追究するオープンエンド型の授業」

第4学年提案「のこしたいもの つたえたいもの」

テーマ「単元を通した評価基準と自己評価を生かした授業」

第5学年提案「災害から身を守る情報ネットワーク」

テーマ「三豊市デジタル防災行政無線の教材化を図った授業」

第6学年提案「長く続いた戦争と人々の暮らし」

テーマ「青い目の人形を軸に、戦争と人々の暮らしを考える授業」

(2) 夏季研提案単元の追実践

○単元観の確立を目指す教材研究(第4学年『もっと知りたい地いきの祭り』より)

学習指導要領にかかれた本単元の『祭り』

イ 地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事

ここでは、民俗芸能などの文化財が地域の歴史を伝えるとともに、そこにはそれらの保存に取り組んでいる人々の努力が見られることや、地域の人々が楽しみにしている祭りなどの年中行事には地域の生産活動や町の発展、人々のまとまりなどへの願いが見られることを取り上げ、生活の安定と向上に対する地域の人々の願いや保存・継承するための工夫や努力を考えることができるようにする。

教材研究で行き着いた最終的な「単元観」

祭りは、そこにこめられた人々の幸せへの変わらぬ願いを受け継ぐものである。

この実践では、よさこいを中心とした高瀬町の祭り「空射矢まつり」を取り上げた。この祭りは祇園神社夏季大祭を起源に、運営の方法を改善していくことで集客力を高めていったものであり、その中にある、地域を盛り上げようとする人びとの思いを中心に單元化していく実践となった。

○切実性のある問いの研究（第3学年『農家の仕事』より）

子どもの意識

農家の人は仕事をするために
とても工夫をしているんだ！
この種なら1時間に200個
ぐらいまくことができるぞ！

子どもの意識
と事実のズレ

社会的事象

レタス農家の石川さんは1時間に
5000個の種をまく事ができる。

問い『石川さんはどうやって1時間に5000個もの種をまくのだろうか？』

この実践では、疑似体験を通して、自分なら1時間に種を200個まくことができるという意識を作り出した後、農家の人は子どもたちの意識を遙かに超える量の種まきができる事実を伝えることで、意識と事実のズレを作り切実性のある問いを見いだす実践となった。

4. 本年度の成果と課題（○成果●課題）

～単元観の確立を目指す教材研究について～

○内容の見方を終始論点とした教材研究ができた

追実践をする中で『イベント性の強い空射矢祭り』を指導要領に書かれている『地いきの人たちが受け継いできた年中行事』として見てもよいのか？』といった論点の議論があった。複数の教師が「空射矢祭り」の価値について何度も意見を交わしたり、教材研究を進めたりしながら祭りに込められた思いや経緯などの妥当性について話をした。この内容吟味の過程こそ、研究の1つの成果である。

○単元観が明確になると単元を構成する方向性がはっきりする

単元観がはっきりすることで、教える内容や考える事柄がはっきりする。また、研究を通して感じたことは「子どもは教師の教材研究の後を追って学んでいく」ということだった。単元の流れを作り上げていく上で教材研究の足跡が授業に大きく反映されることから重要性を再認識できた。

●教材を価値づける視点とは。

追実践では『イベント性の強い空射矢祭り』を『地いきの人たちが受け継いできた年中行事』として見てもよいのか？』といった点で課題も残った。「空射矢まつり」は神事が軽視されている点・祭りの歴史が浅い（1913年発祥）点から、これまでの実践で扱われてきたいわゆる「収穫祭」とは一線を画す。しかし、社会全体の流れを見ると集客力の高いよさこいを取り入れはじめた祭りも多い。このように新しい社会的事象を価値づけていくには、よりどころになる視点が必要である。

～切実性のある問いの研究について～

○学習意欲を高める問いとその条件

「切実性のある問い」つまり「驚きや困惑などを持って生まれた問い」は子どもの課題意識を高め学習意欲を高めた。その際にいくつかの問いの条件のようなものも見えてきた。そのひとつが具体性である。

「工夫」や「努力」・「ひみつ」など抽象度の高い言葉では、子どもたちが自分の言葉で語れる問いは生まれない。具体から抽象へと高めていくのが子どもの学びにとって自然だと感じた。

●驚き・困惑を問いに高めるためには支援が必要

実践を通して、子どもたちが「驚き・困惑など」を持って社会的事象と出会うことと問いが生まれることの間に支援が必要ではないかと感じた。つまり「驚きや困惑」はあくまで心の揺れであり、それをもとに疑問を作ることで「切実性のある問い」になっているのだろう。今後はその間に必要な支援を模索していきたい。

香社研だより vol.1

発行者 香川県小学校社会科教育研究会
香川県小学校教育研究会社会科部会
会長 岡根 淳二

香社研テーマ

「社会科ノート」による思考力の育成
—「社会科をひらくカリキュラム」の新たな展開による—
—平成23年度研究の視点「学習評価を『自己調整』の過程からせまる」—

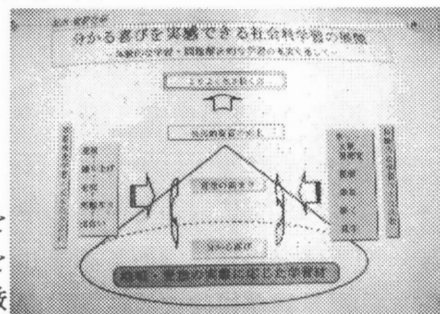
坂綾社研テーマ

分かる喜びを実感できる社会科学習の展開
—体験的な学習・問題解決的な学習の充実を通して—

6月定例会 坂出・綾歌ブロック集会 平成23年6月18日(土) 於：宇多津町立宇多津北小学校

1. 坂出・綾歌社会科研究会提案 宇多津町立宇多津北小学校 教諭 宮武克明先生

- 提案の主張点
- (1) 体験的な学習の充実
- (2) 問題解決的な学習の充実



(1) 体験的な学習の充実

バーチャルな世界に慣れた児童だが、生き生きとした人、物、事と出会うことで様々な問いが生まれる。そして、調べ学習や交流を通して「そういうことなのか」と気付き「なるほど」と納得できる厳選された授業を組み立てることで、思考力・判断力・表現力を育てることができると考える。

体験的な学習を通して児童が感じることや考えることは多様である。これを自分の言葉に置き換える事で、意見の違いが顕在化する。この違いをもとにすれば、追究意欲が持続する学習問題や話し合い活動へとつなげることができる。

(2) 問題解決的な学習の充実

問題解決的な学習の過程における「言語の役割」として「人々の行為や出来事の実事をとらえる役割」「人々の行為や出来事の社会的な意味を考える役割」「協働的な学び合いを展開する役割」の3点が挙げられる。話し合いの場面では「人々の行為や出来事の実事をとらえる役割」、「協働的な学び合いを展開する役割」が発揮される活動を設定する。同じ社会的な事象に対して違う意見をもつ児童同士が互いに説得し合う活動を通して、より確かな考えや判断へと至ることができる。

2. 実践提案 宇多津町立宇多津小学校 教諭 宮武克明先生

第4学年 「ごみのしよ理と利用」

- 提案の主張点
- (1) 体験的な学習の充実
- (2) 問題解決的な学習の充実



(1) 体験的な学習の充実

ごみについて理解を深めるため、実際に各家庭で1週間のごみ調べを実施し、種類の多さとその量を実感する場を設けた。さらに、ごみ回収の様子や施設を実際に見学したり、係の方から話を聞くことで、児童は具体的に課題をとらえ、課題について考えることができる。さらに、児童が感じたことや考えたことに呼応する資料を提示することで話し合いを活性化し、疑問を解決しながらごみ学習を通して、思考力・判断力・表現力を培う。

(2) 問題解決的な学習の充実

坂出・綾歌社研では単元計画に学習問題を位置づけ、教師も児童も見通しをもって授業を進めることが

できるようにしている。また、「ノート作り10か条」を作成し、目指すべきノートの姿を児童と教師が共有しつつ授業に臨んでいる。特に、「自分の調べや意見」「ポートフォリオ」を重視し、お互いの考えを深めるノート作りを目指している。授業中、少なくとも2回は自分の考えを書く活動を設け、考えたことを自分の言葉でまとめる力を育成している。

また、話し合い活動を活性化させるためには、児童が具体的で根拠の明確な考えをまとめられるか、対立する意見へと焦点化できるかが重要であるので、板書を充実させるとともに、考えを詳しく論述する時間を設定している。

3. 討議記録

- 分かる実感を大切にし、丁寧にまとめている。体験に始まり言語を大切に授業が組み立てられている。
- 問題解決の中に発展がある。この単元では社会参画であるが公人として生き抜くことがねらいである。地域の一員としてどう関わっていくか考えさせる展開もできるがここでは、「自分だったら」と考えて話し合うことで、自分がするという意識を育てている。
- 体験を通して、児童が予想した「缶」や「瓶」は意外と少ないと実感させ、生ゴミの量の多さに目を向けさせたかった。話し合いに時間をとることで、生ゴミのルールについて、具体的に考えることができた。
- 我々が子どもの頃と比べごみへの意識は変わってきている。昔は無駄なく、今はどう分別したり、再利用したりするのか。この学習を続けることで、社会の形成に参画する資質・能力を培うことにつながる。
- 体験から授業が作られているところがすばらしい。参画意識を培うためどう評価してどう子どもに返すのが重要。

4. ご指導

◎ 西部教育事務所主任指導主事 森昭二先生

(1) 体験活動について

体験を家庭でさせるとばらつきが生まれる。体験の質が異なるので、教室の中でどうまとめていくのか。統一しておかないと意識のずれが起こる。



(2) 言語活動の役割

- ① 事実を正確に理解する。
- ② 他者に分かりやすく伝える。
- ③ 事実・説明の解釈をするとき、ペア・グループ等で伝え合う事で集団の考えに発展させる。その時に重要なのは、質的な高まりへどう教師がアプローチすることができるのかということである。
- ④ 言語活動の高まり。事実としっかり結びつけることが重要である。
- ⑤ 児童の言葉の裏を考え、思考を深めるよう、教師が聞いてつないで返す。
- ⑥ 対立のある話し合いを考える。

(3) ノート作り

- ① 評価～大事な言葉に線を入れる。ノートで学習の流れが分かるので、保護者とのコミュニケーションツールとしてノートは便利。
- ② ノートの選び方やきまりを学校で統一すると良い。
- ③ ノートを評価・診断しているか。

◎ 香社研 0B 唐木裕志先生

(1) ノート作り10か条について

ポートフォリオは単なる振り返りではない。自分の考えをモニタリングしながら自分の学習評価をしていくことである。また、学んだことを保護者や地域の方にどんどん伝えて欲しい。先頃の震災では学んだことを地域の人に伝えて助かった地域がある。

(2) 資料について

資料はどんどん変わっている。最新のものに敏感になる。アンテナをはり、教科書や指導要領に先んじた授業をするつもりで臨んで欲しい。

(3) 津波を例にして

歴史は未来に向けての教訓である。香川のハザードマップも防災の一つとして目をむけておいて欲しい。余震はいつまで続くかなどは歴史の資料の中にある。調べてみると興味深いことはたくさんある。

【編集後記】

宇多津北小学校で幕を上げた本年度第1回の定例研修会。今回はごみの処理について、体験、見学を基盤とした素晴らしい実践でした。子どもたちの学びは、生活の中から生まれる気付きにあることを学ばせていただきました。

運動会等、学校行事の準備などでお忙しい中、担当郡市である坂・綾小研の先生方をはじめ、ご協力いただいた先生方、ありがとうございました。

香社研だよりvol.2

香社研テーマ

発行者 香川県小学校社会科教育研究会
香川県小学校教育研究会社会科部会
会長 岡 根 淳 二

「社会科ノート」による思考力の育成
— 「社会科をひらくカリキュラム」の新たな展開による —
平成 23 年度研究の視点「 学習評価を『自己調整』の過程からせまる 」

高松市社研テーマ

「社会科ノート」による思考力の育成を図る
— 子どもの学習意欲を大切にし、
読解力と豊かな言語活動の展開による、日々の授業実践の充実を目指して —

7月定例会 高松南集会 （於：高松市香川町農村環境改善センター）

1. 実践提案：高松市立仏生山小学校 木村 舞 先生・高松市立大野小学校 轟 秀明 先生
第4学年 「住みよいくらしをつくる」 ～水はどこから～

○主張点

- (1) 児童が調べ、まとめたことをもとに交流することで基礎・基本的な事項を習得し、探究への意欲を高める単元構成。
→ 指定したキーワードを使わせることで、大切な事柄を落とすことなく、それぞれの児童が自分なりの言葉で考えをまとめていく。
- (2) 資料を読み取り、地図や絵図にまとめたりする学習活動により思考力・表現力を育てる。
→ 地図を見ながら水が送られている区域を確認し、配水コントロールセンターと浄水場の関係を考え、絵カードをもとに矢印を用いた仕組み図を作成する。
- (3) 実生活につないだ学習課題の設定により、子どもの意欲を高め、地域社会の一員として生きる力を育む。
→ 浄水場で働く方をゲストティーチャーとして招き、現場で働く人の生の声を聞かせることで、意欲を高める。

2. 討議記録

○「どのようにしてたくさんのお水を確保しているのだろう」、「どのようにして水をきれいにしているのだろう」、「水を大切にするためにどのようなことをしたらいいのだろう」の学習課題は、教師が提示したのか？

木村：新聞記事を読ませ、子どもの気づきをもとに提示した。

轟：子どものつぶやきをもとに提示した。事項を整理しながら、ルートのつながりを考えていこうという流れを作った。

○作成した『水ブック』は単元終わりではどう扱うのか？

木村：保護者に見せるように声かけをした。ポスターを作ろうという考えには至らなかったため、教師側から声をかけた。

轟：『水ブック』を作ってからどうしたいかを子どもたちに問いかける予定だった。『水ブック』は子どもの学習スキルを伸ばす位置づけだった。

○子どもの疑問をうまく捉えて、実生活から入って問題を作ることができている。黄色と赤色のシールをもとに、浄水場での人間と機械の関係に気づかせていた。言語活動を取り入れ、思考を再構成する学習へのつながりもできていた。

○資料をもとに考える活動では、子どもにどう支援したのか？

→ 時間を分けて一つずつの資料を読み取らせたが、全体での読み取りになった。机間巡視を行いながら、細かく指導した。

○評価をつける場合、1の児童のみをどうするか考えがちであるが、2の児童も教師はかかわっていかなくてはならない。(3の児童は思考が深められており、2の児童との距離は大きく開いている。)

○仕組み図の中に「自分」という立場を入れてみれば、自分の役割につながり次の単元につなげることができる。また、「人が協力してくれているのにたくさん使うの？」と終われば、水に対する意識づけができた。

3. ご指導

【1】高松市教育委員会学校教育課 岡本英孝先生

(1) 教材の構造化

教師だけではなく、児童の考えも教材として取り込めていた。多種多様な資料の中でも精選した価値ある資料を教材として用意したい。

(2) 単元の見通し

どのような仕組み図になるのかを念頭操作ではなく、教師が実際に作って確かめていた。子どもが学んでいく道筋を立て、単元の流れにそって登場する言葉の意味をしっかりと理解させていた。

(3) 再構成の学習による思考力の育成

授業は一人一人の基礎・基本、活用、深まりが大切である。子どもは社会現象について、それぞれの問いにそって考え、その考えをグループで交流し、それらの考えをもとに自分の考えとして再構成する。そのプロセスを大切にするため、一人でじっくりと考えることができるような手だてが必要である。

(4) 学習課題

これから学ぶことをはっきりと明示する。また、知識だけを得るような課題ではなく、人の意識を変容させる課題を設定する。

(5) 家庭との連携

自分が考えたことや思ったこと、分かったことをまとめたものを家に持って帰り、保護者に発表させる。保護者からはコメントをもらい、子どもたちに「学んだ」という形を作る。

【2】香社研OB 関根建一 先生

(1) 平和学習

広島に行くだけが平和学習ではない。広島に行って何を考えたかを突き詰め、子ども同士で「平和とは何か」について議論を交わしていくことが平和学習である。そのため、「平和」という教材は枯渇することはない。時間を確保せず平和学習を進めてしまうと、押し付けがましい授業になりかねない。それぞれの子どもが持つ問いを、子どもたちとともに追求していきたい。

(2) 授業研究

日本の教師は現場主義であり、その核となるのが授業である。授業を作るうえで、相談や議論がないと独りよがりの考えになる。子どもたちに価値ある授業をするために議論を行い、考えを深めてほしい。子どもの何を育てたいのか、子どもに何を教えたいのかなどの目標を設定する際には、学力診断テストや生活習慣を分析して子どもの実態を捉えることが授業研究の最初のステップとなろう。その分析から、目標を定め、学習課題を設定し、授業を変容させていくことが望ましい。

【編集後記】

チーム南ブロックの力を存分に発揮した素晴らしいご提案、ご実践でした。「水ブック」を拝見すると、子どもの意識の流れを大切にし、子ども自らの問いから学習計画を立てる、本当に子ども主義に立ったご実践でした。教科研の事前研から南ブロックの先生方で何度も集まり、練り上げた成果を感じました。若い先生のはつらつとした実践報告から、学ぶことがたくさんある定例研修会でした。

今回の定例研で提案された先生方、そして、御指導を頂いた高松市教育委員会学校教育課 岡本英孝先生、高松市市民文化センター平和記念室 関根建一先生、本当にありがとうございました。

香社研だよりvol.3

発行者 香川県小学校社会科教育研究会
香川県小学校教育研究会社会科部会
会 長 岡 根 淳 二

香社研テーマ

「社会科ノート」による思考力の育成
— 「社会科をひらくカリキュラム」の新たな展開による —
平成 23 年度研究の視点「学習評価『自己調整』の過程からせまる」

高松市社研テーマ

「社会科ノート」による思考力の育成を図る
— 子どもの学習意欲を大切にし、
読解力と豊かな言語活動の展開による、日々の授業実践の充実を目指して —

9月定例会 高松東・西集会 (於：高松市ふれあい福祉センター勝賀)

1. 実践提案：高松市立木太小学校 教諭 柏 徹哉先生

第4学年 「住みよい暮らしをつくる」 ～水はどこから～

○主張点

- (1) 教材の軽重をつけるとともに、習得・活用の学習の位置づけを考えるために、教材研究の初めに「教材の構造図」を作成する。
→ 教師が教科書の内容を、「習得の学習」でおさえるべき事項か、「活用の学習」でおさえる事項なのかを分析する。そして、教科書の順序を変え、「習得の学習」から「活用の学習」へと進めていく。
- (2) 見学・体験活動を重視し、浄水場の見学を単元に組み入れるとともに、体験したことをもとに思考操作する活動を重視する。
→ 「体験したことを基にした学習材」、「調べたことを基にした学習材」を仕組み図にまとめることで、思考操作を伴った表現活動になり、学習が深まる。
- (3) 「ワンペーパーポートフォリオ」による自己評価、そして思考の可視化による教師評価の充実を図る。
→ 単元において「どんなことを学習したのか」、「自分の学び方がどのように変化したのか」を1枚のポートフォリオに残すことができる。

2. 実践提案：高松市立円座小学校 教諭 大奥 洋介先生

第4学年 「住みよい暮らしをつくる」 ～水はどこから～

○主張点

- (1) 学習意欲を高める手立て
→ 教師が学習問題を与えるのではなく、児童自らが学習課題を「考えたい」と思うことが大切である。自分の予想と事実・結果の間に「ズレ」が生じた時、児童は「なぜそのような事実が存在するのだろう。」と、児童の中に「なぜ」という思考が生まれる。つまり、児童の思考と事実・結果の「ズレ」によって、「考えたい」という意欲を高めることができるのである。
- (2) 再構成の学習
→ 現在もっている素朴な知識や概念を、深まった知識が組み入れられた表現・論説、理解へと深める再構成の学習を、単元を通し何度か設定している。課題としては、再構成の学習には「思考図」「カード操作」などの他にどのような形態があるか考える必要がある。

3. 討議記録

- 2つの提案ともに、問題解決学習を大切にしている。本時の問いの答えを、教師が本時に提示した資料から読み取るのではなく、児童の教科書やノートの中から見つけさせたかった。
- 児童に「どんな資料が必要か」、話し合いの中から考えさせてはどうか。
- 「給水マップ」を使うことで児童の視覚にうったえたり、意識のずれを生み出せたりすることができた。また4つの資料から2つを選択して関連を考える授業は、県の学習にも生かすことができる。

4. ご指導

【1】東部教育事務所主任指導主事 真鍋康秀 先生

(1) 指導と支援

全員の児童に確実に習得させることが学習指導要領の趣旨である。したがって、児童全員が本時の目標を達成するため、どのような過程で支援を行ったかが大切になる。

(2) 見通しを立てたり、振り返ったりする学習

児童が自分の学習を振り返り、「こんな学習内容が分かった」と、内容の理解で終わらせるのではなく、自分の学び方の成功と失敗を理解し、次の学習につなげていく児童の育成が求められている。

(3) 子どもの聞く姿勢・教師の聞く姿勢

「課題を解決するために必要な資料は何か」、教師が児童に考えさせ、解決の見通しをもたせる。

(4) 教材の構造化

限られた時間の中で、「児童にどんな力を育てるのか」、教師が教材を再構成し、軽重をつけて学習を進めていくことが必要である。

(5) 思考図

児童の能力に応じた資料を提示することが大切である。「どのような資料ならば児童が理解することができるか」、「どのような提示の仕方が適切か」などを考え、教師が資料を加工する。

(6) 評価

教師が具体的な評価のポイントをしっかりとっていなければならない。

【2】香社研OB 植松 勝 先生

事実認識の段階

社会科の授業において、もっとも大切なことは「児童の事実認識をどう豊かにさせるか」である。なぜなら、児童の深い学習意欲が生まれてくるからである。したがって、教師が一人一人の子どもの豊かな事実認識の育成を大切にしていけば、自然と深い授業に入っていくことができる。そのためには、教師自身が教材に対し、豊かな事実認識をもっていなければならない。

しかし、「これだけは児童に理解させたい」という教師の思いから、児童の豊かな事実認識を削ぎ落されてしまうことがある。1つのグラフを読み取っても、児童一人一人膨らんだイメージ、事実認識が存在している。事実認識の段階で、しっかりとその事実が頭に描かれると、児童の思考はさらに深い問いへと進んでいく。そのためには、事実認識の段階において、個別指導することが必要である。

【編集後記】

今回は、両実践ともに授業者が参加できませんでしたが、同じブロックの先生方の結束力により、すばらしい提案と討議が展開されました。まずは、西・東ブロックの先生方に敬意を表すと共に、感謝の気持ちを伝えたいと思います。両実践ともに水の単元でしたが、両方ともに問題解決の筋を大切にされ、子ども達の思考に特化した展開を組み、具体的に提案してくださいました。問題解決的な学習の一層の充実のために、「問いの重要性」「再構成の大切さ」「自己調整の必要性」を感じることができました。

今回の定例研で提案された先生方、そして、御指導を頂いた東部教育事務所主任指導主事 真鍋康秀先生、香社研OB植松勝先生、本当にありがとうございました。

香社研だよりvol.4

発行者 香川県小学校社会科教育研究会
香川県小学校教育研究会社会科部会
会 長 岡 根 淳 二

香社研テーマ

「社会科ノート」による思考力の育成
—新学習指導要領に基づく社会科をひらくカリキュラムによる—
—平成23年度研究の視点「学校評価を『自己調整』の過程からせまる」—

小豆社研テーマ

基礎・基本の確実な定着とその発展を図る学習の展開
—基礎基本の内容を習得し、思考力を育てる社会科学学習の在り方—

11月定例会 平成23年11月12日（土）於：高松市銀星旅館

○ 実践提案：土庄町立湊崎小学校 黒川 幸宣 先生

4年「住みよいくらしをつくる ～ごみの処理と利用～」

○ 主張点

- 主張点1 自分の生活とのつながりから学習課題をたてたり、教師が地域素材を教材化したり、副読本を調べる資料として活用したりし、児童の学習に対する意欲化を図った。
- 主張点2 ごみが処理・利用されるまでの道筋をフローマップに書き出すことで学習の見通しを持たせ、毎時間ごとに学習内容をフローマップとリンクしてまとめることで、「どこで、どのように処理・利用されているのか」の理解を促した。
- 主張点3 社会に参画するための資質や態度が育つよう、地域の実情から浮き出る問題点を提起し、児童が必要を感じてポスター作りをし、地域に働きかけた。

○ 授業での取組

① フローマップの活用

学習の見通しを立てるために、ごみが処理・利用されるまでの道筋を予想してフローマップに書き出した後、副読本の図をもとに正しいフローマップを作成した。そこから順々にどのように処理されているのかを教師が町役場に行き調べる地域教材や副読本を用いて調べ、一時間一時間の学習で分かったことなどをフローマップの図とつなげてノートにまとめていった。これにより、燃えるごみや燃えないごみ、資源ごみなどがどこで、どのように処理・利用されているのかを児童が十分理解することができていた。

② ポスター作り

「どこでどのように処理されているのか」が分かった後、埋め立て地には埋め立てられる限界があるという事実を提示し、たくさんごみを出すととても大きな問題になるということを理解し、どのようにしてごみを減らす取り組みが行われているか調べた。そして、地域の埋め立て地に資源ごみが捨てられている（身近な地域の実情）（地域素材）写真を提示し、ポスター作りに目的意識を持ち「何をかけばよいか。」「どのようにかけば伝わるか。」など、一人一人がじっくりと発展的な学習にも取り組むことができていた。また、ポスターづくりを通して基礎・基本の理解の評価と定着を図ることができた。

○ 討議内容

- ・ フローマップを作成させるときに、はじめから子どもに全部かかせるのではなく、まずは予想させる段階があってもよかった。
- ・ 埋め立て地の問題について、一つの視点からだけではなく、地域との関係を大切にし、クリーンセンターや町役場などでの取り組みなど、視点を変えることで3Rがより理解できるのではないか。
- ・ ポスターの作成にあたっては、例えばポスターの見出しを児童たちで出し合って、吟味していくことで思考につながっていく。また、行政や地域住民の考えや立場を分かった上で、ポスターに何をかいていけばよいかを子どもたちが選んでいかなければいけない。

さぬき・東かがわ社研テーマ

思考力の育成をめざした地域プランの開発
—指導に活かせる評価—

11月定例会 平成23年11月12日（土）於：高松市銀星旅館

- 実践提案：東かがわ市立本町小学校 松村 和仁 先生
4年「県のようにす ～県のじまんパンフレットをつくろう～」

○ 主張点

新学習指導要領の趣旨にそった地域プランの開発や、地域学習における言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する指導法についての考察。

○ 授業での取組

① 香川県の立体地図の作成

香川県の白地図の上に、紙粘土で高低を付けていく。地形図に照らし合わせながら、着色したり、主な交通網も書きこんだりして香川県の土地の様子を考えていった。立体地図を作成することで、地図にあまり興味をもてなかった児童も意欲的に取り組むことができた。

また、思考力を育成するために、「CAや機長になって香川県を紹介しよう」という言語活動を行った。この活動を通して、児童の地図を見る視点を高くし（上から見る）地形を紹介するというねらいがある。

② 白下糖と和三盆糖を食べ比べる活動

東かがわ市の特産物を食べ比べる活動を行うことは、児童の学習意欲を高めることに効果的であると考えた。また、食べ比べの際に五感を使って感じたことをきちんと整理して記録することを大切にしたい。これにより、比べる観点が増え、その後の調べ問題が作りやすくなると思った。

○ 討議内容

- ・ 言語活動の弱点としては、口が上手い子どもを育てたいという訳ではないということ。また、実社会と実生活をどのように出会わすかが大事である。体験を言語化するときには、子どもなりの言葉で急がずにさせることが重要である。
- ・ 思考・判断・表現は見えにくく評価しにくい。そこで公平性と同一性のどちらで評価するのか。
- ・ 「なぜ県の自慢パンフレットを作るのか。」という単元ははじめの課題が必要である。それによって、児童は、「県が頑張っているの自分たちも協力しよう。」という気持ちになると思う。

○ 御指導

◇香川県教育委員会事務局東部教育事務所主任指導主事 真鍋 康秀 先生

- ・ ポスターの中で順位づけ、児童の強く伝えたいところ、自分のこだわりを明確にもたせ、それにあっているかどうかという視点で評価する。
- ・ ポスターを描く前にこだわりをもたせたのかどうか、また、なぜ選んだのかが語れるようにすることが大事である。
- ・ ポスターなどの表現物は、地域に出ていくと学校の顔になり、学校の信頼を得るためのものである。そこで、表現をうまくいかすためにポイントを示したり、ポスターを描かせたりする指導が必要である。
- ・ 話形を提示して、児童がどのように書けるかが重要である。
- ・ 問題解決学習を大切にしているのがよかった。予想が最後までどうなっているのかしつかり吟味する必要がある。

◇香社研OB 佐藤 正文 先生

- ・ 長さや大きさ、かさなどは具体的なものを言ってあげると児童は授業に興味をもってくれる。
- ・ 例えば、2つのグラフを見たときに出る疑問を使って、矛盾するものから課題へつなげていくことが大切である。
- ・ 教師がある程度授業のスタイルをつくることで児童も授業にのってくる。
- ・ 単元が始まる前に終わった後の児童の反応を考える。授業をして家に帰った後、保護者に授業の話をも満足そうに話せることが重要である。

編集後記

今回は、香社研で長年提案を続けてきたベテランの松村先生と、新進気鋭の若い先生、黒川先生の両先生の提案でした。松村先生は、県の特徴を立体地図や実際のお砂糖を用いて抽象的になりがちな本単元を、具体的に学ばせる方法を提案してくださいました。また、黒川先生は、社会参画につながる、価値判断、意思決定の場面でのご提案をくださいました。両実践とも、大変示唆に富んだものでした。指導者の真鍋先生、佐藤先生、そして、提案郡市の先生方本当にありがとうございました。

香社研だより vol.5

発行者 香川県小学校社会科教育研究会
香川県小学校教育研究会社会科部会
会長 岡根 淳二

香社研テーマ

「社会科ノート」による思考力の育成
—新学習指導要領に基づく社会科をひらくカリキュラムによる—
—平成23年度研究の視点「学習評価を『自己調整』の過程からせまる—

丸社研テーマ

自分づくりの社会科学習
—基礎・基本の定着と自ら学ぶ問題解決能力の育成を求めて—

10月定例会 丸亀集会 平成23年10月15日（土）於：岡田コミュニティセンター

○実践提案：丸亀市立城乾小学校 西川 由華 先生
6年「天皇中心の国づくり」

○主張点

言語活動を充実させることによって、児童の興味・関心を喚起したり、思考力・判断力・表現力を伸ばしたりする。

授業での取組

① マップ図を使った導入

授業の導入時に、教科書や資料集にある挿絵の資料から分かることを、マップ図に書き表す活動を行い、整理していった。整理するとき、関係のある考えを線でつなぐことや、「服装」や「食べ物」、「住居」などに仲間分けすることに留意した。各自が思い思いに作ったマップ図を有効に活用することによって共通の課題意識を持たせることができた。

さらに、考えをふくらませている意見を黄色で板書したり、そこから本時で解決したい課題を話し合ったりすることによって、学習課題が価値あるものとなり、児童の学習意欲を高めることができた。

② ペープサート劇による交流

ワークシートを使用し、吹き出しの中に、資料の言葉をそのまま書くのではなく、要因や背景などが分かるような自分の言葉に置き換えて書かせ、劇の台本とさせた。ただ事象を知識として身に付けるのにとどまらず、そこにどんな思いがあるのかを考え、その人物になった気持ちで考えを広げられると予想したからである。また、資料の言葉が難しく、社会科嫌いになりそうな児童も、簡単な言葉に置き換えられたペープサート劇なら楽しく学ぶことができると考えたからである。



③ 歴史新聞による表現

単元のまとめとして、自分の心に残ったところを新聞にまとめた。書く前に、時代ごとに3つのグループに分け、その時代に活躍した人物や、起こったおもな出来事などを復習し、一番心に残ったところを選べるようにした。また、新聞には必ず4コマ漫画を入れることを条件とし、歴史的事象をどのようにとらえ、一言でまとめるのかを指導した。

④ 年表による知識

年表を作ることで、それぞれの時代の長さが分かったり、前時に学習した時代を復習したりすることができる。年表作りでは、行ったことの古い順に左から書く、分かる場合は年号を書く、箇条書きで、簡潔にまとめる、という指導だけを行い、後は子どもたちがそれぞれ自分で考えて書いていった。

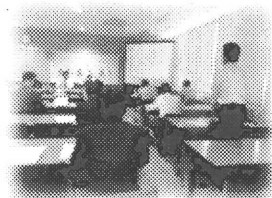
○ 討議内容

1. マップ図に関して

1つのことから回りに広げていけるのが良さ。これとこれもつながるといった新たな発見もあり、思考を広げることができる。マップ図から問いを作るのは難しかったかもしれない。マップ図のような思考が広がった状態で問いをつくるのではなく、思考をしばってから問いを作った方が良かった。思考をさせる時は、拡散させたり収束させたりすることを繰り返すことで、考えが深まっていく。マップ図で考えたことを縮めて、思考をしばっていく過程をしっかりと丁寧にした方が良かった。

2. ペープサート劇に関して

吹き出しに言葉を書き、人物の気持ちを想像することは、社会科の自分作りにおいて大変重要なもの。ペープサート劇をする場合は、前に出て演技する時に台本は読まない方がよい。子どもの個性が出て、自分の言葉を使って劇をしようとするので、内容をしっかりと理解していないとできない。また、子どものオリジナルの考えなどもある程度認めてあげたい。



3. 新聞作りに関して

新聞作りは、4コマ漫画を必ず入れるようにしたのは、流れが分かって良い。国語で書く力をしっかりと育てないといけない。新聞の小見出しは「問い」であった方がよい。その「問い」に対する答えを自分の言葉で書くことによって、内容も充実した新聞になる。

○御指導

◇西部教育事務所 森 昭二 先生

- ・マップ図は拡散的な思考を促すのにはとても良い。その理由は、①日常生活と結びついている。②子どもの問いが大切にされている③コミュニケーションを通して、共同的な学習をすることができ、45分間の学習意欲を保つことができる。マップ図を整理して考える技法を考えていく必要がある。
- ・まとめにおいて、総合して考えることが大切である。3つの視点をまとめる部分が重要だった。まとめ方が3つで終わるのではなく、それを1つにまとめて書くことが大事。並列で終わらず、まとめを概念の域まで高めることを目指さなければならない。
- ・心情面を考えさせることは果たして良いのか。それは本当に歴史を考えているのかどうか。もしかしたら、子どもにイメージを植えつけていることにはならないか。
- ・1つの方向に子どもの思考が固まっていったら、こんな見方、考え方もあるよという教師の投げかけが大切。あえて教師がちがう見方、資料を提示したりして子どもをゆさぶることもいいのではないか。

◇香社研 OB 山崎 敏和 先生

- ・子どもは、本をみただけで、分かっているつもりでも分かっていないことが多い。子どもに、内容がしっかりとおちていくような実践をこれからも続けてもらいたい。
- ・授業は子どものためのもの。子どものためになっていない授業が多い。目線を合わせながら、授業をしないとイケない。
- ・学習の流れは単純化していかないといけない。子どもの学習意欲を起こさせ、分かりやすくしないとイケない。どうやって学習意欲を起こさせるかを、しっかりと考えることが大切である。
- ・教えることを怖がっていないか？教えるべきことは教えていないと、子どもから教えていないことは出てこない。何を教え、何を考えさせるか、教材の研究をしっかりと、子どもが伸びる授業を期待する。

編集後記

お祭りの太鼓台や獅子舞の音が豊作の喜びを感じさせた岡田までの道。今回の定例会では、授業における様々な場面での思考力の育成をねらったすばらしい実践でした。特に、マップ図の効果的な使い方について、たくさんの意見が出され、参会された先生方にも、お祭りに負けないほどの収穫の喜びを得られたのではないのでしょうか。

今回の定例研で提案された先生方、そして、御指導を頂いた香川県教育委員会事務局西部教育事務所森昭二指導主事様、香社研 OB の山崎敏和先生、本当にありがとうございました。
(香社研事務局)

「研究フォーラム2011」報告

例年、1年のまとめの会として位置付けられていた香社研「研究委員会」は、より広くより多くの先生方の学びの場となるようにと、一昨年度から香社研「研究フォーラム」という名前に変え、パネル発表という形で実践交流を行っています。本年度は、昨年度に引き続き、國學院大學教授安野功氏（前文部科学省初等中等教育局教科調査官）をお招きし、ご講演いただきました。休日にもかかわらず、過去最多の150名を超える参会をいただき、盛会裏に終えることができました。



1 目的

- ・ 各郡市の今年度の実践を交流したり、講師の方々の講評、講演を通して、研究を深化し、来年度の研究の方向性を探る。
- ・ 香社研の研究を広く県内外や他教科の先生方にも広める。

2 日時 平成23年2月18日（土）13:00～16:50

3 場所 香川大学教育学部附属坂出小学校 体育館

4 日程

- ◆ 開会 13:30～13:35 会長挨拶（岡根 淳二 校長先生）
- ◆ 実践交流（パネル発表） 13:35～15:00

13:35～13:40 準備・移動

13:40～14:05 第1ラウンド（高松東，小豆，三・観）

14:05～14:30 第2ラウンド（高松西，坂・綾）

14:30～14:55 第3ラウンド（高松南，丸亀）

- ◆ パネルディスカッション「来年度の研究の方向を探る」15:00～15:50

パネリスト	高松市立三溪小学校	教諭	野土 裕彦
	高松市立浅野小学校	教諭	宮脇 好美
	金沢市立泉野小学校	教諭	泊 和寿
	香川大学教育学部附属坂出小学校	教諭	山内 秀則
	香川大学教育学部附属高松小学校	教諭	大嶋 和彦

- ◆ 休憩 15:50～16:00
- ◆ 研究への助言 16:00～16:45 國學院大學教授 安野 功先生
- ◆ 閉会 16:45～16:50 副会長挨拶（池田 孝徳 校長先生）

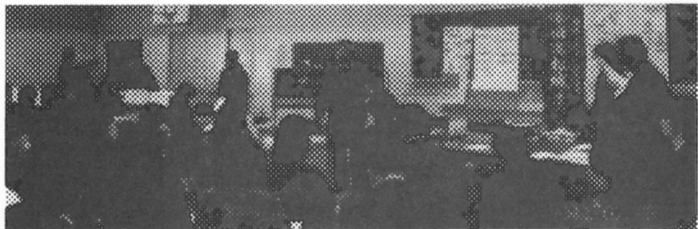
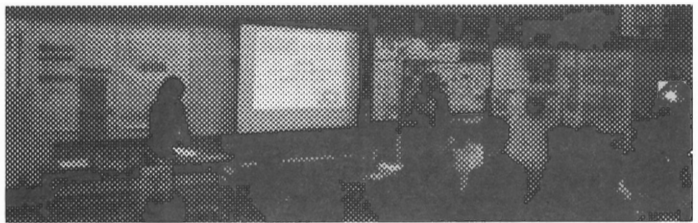
5 活動の概要

(1) 実践交流

各郡市社研において本年度実践された成果を持ち寄り、パネル発表という形で交流を行いました。本年度の特徴は、若い先生方，女性の先生方の発表が多かったことです。会場全体が非常に活気づきました。

まず、各郡市社研の基本的な考え方が提案され、次に、資料を使って実践が報告されました。そして、参会者から質問や意見が出され、熱心な討議が行われました。

実際に授業で使った子どものノートを囲んでそれを基に話し合いが進んだり、開発した教材・教具を実際に使って模擬授業が行われたり、と趣向を凝らした報告が次々に行われました。参会された先生方からは、「非常に具体的で勉強になる。」「明日からの実践に即、生かせる提案だ。」という声が聞かれ、大変好評でした。これらの郡市の提案をいかに来年度研究に反映させるかが今後の課題となります。



(2) パネルディスカッション

本年度全小社研金沢大会で中核となって研究を進めてこられた金沢市立泉野小学校の泊和寿先生をゲストとしてお招きし、香社研の研究部長の大嶋和彦先生、高松市社研研究部長の野土裕彦先生、来年度県大会を開催する会場校である高松市立浅野小学校の宮脇好美先生と次年度研究の方向を探りました。本年度研究の成果と課題を整理し、全国の動向をふまえつつ、来年度研究の展望を描いていきました。「限られた時間の中で、量も質も多くなった教科書をいかに有効に活用するか」「方法論に傾倒しがちだった研究を内容論に軸足をいかにシフトするか」「思考・判断・表現の力と知識・理解の力をスパイラルに培っていくために」等、様々な立場から貴重な提言をいただきました。内容論を進めていくためにも、指導に軽重を付けていくためにも、大嶋先生から提案された視点が1つのたたき台になると共通理解されていきました。

(3) 講演

國學院大學教授安野功先生から「研究への助言」として貴重なご示唆をいただきました。

「教科書活用」と「社会科授業の日常化」をキーワードに、教科書をどのように活用すれば、社会科がめざす学力が育つ授業を普段の授業で日常的に展開できるのかについて、お話いただきました。社会科を専門とする参会者、社会科を専門としない参会者、どちらにとっても有意義なご講話でした。「調べる」ためには、「分からない」という意識が必要で、「分からない」から「考える」のだ、と子どもの意識の流れと教科書の活用ポイントを具体的にお示しいただきました。また、「社会科が育てるべき学力とは何か」「教師はどのようにして教科書を分析すればよいか」「子どもが教科書を活用するとはどんな姿なのか、そのために教師はどんな指導をすればよいのか」という今後明らかにするべき3つの問いを提示していただきました。次年度研究に向けて、参会者全員が元気になる助言をいただきました。



香社研研究フォーラム記録

記録者 高松市立浅野小学校 教諭 轟 秀明

◆ パネルディスカッション概要

○ パネリスト

・石川県金沢市立泉野小学校（石川県社会科研究会研究部長）	教諭	泊	和寿
・香川大学教育学部附属高松小学校	教諭	大嶋	和彦
・高松市立三溪小学校	教諭	野土	裕彦
・高松市立浅野小学校	教諭	宮脇	好美
・香川大学教育学部附属坂出小学校	教諭	山内	秀則

【県全体提案について】

「来年度の研究の方向性を探る」・・・スライドによる提案

研究部長 香川大学教育学部附属高松小学校 教諭 大嶋 和彦

◇ 次年度テーマ（案）

社会的な見方・考え表し方・在り方の学びを社会参画につなぐ学習
～教科書活用による社会科授業の日常化～

◆ 研究への助言

講師 國學院大學 教授 安野 功先生(前文部科学省初等中等教育局教科調査官)

〈はじめに〉

こんにちは。先程ご紹介頂いた安野です。先程の実践交流、それからそれを受けて、来年度の研究のテーマを考えていくパネル討議を聞かせていただいて、どの先生方にも共通して言えるのは、できるだけ社会科を日常化したいということではないかと思いました。特別な授業ではなくて手元にある教科書とか資料集などを使って、いつでもできる授業を行いながら、社会科の力をつけさせたい、そして、それを日常化する。それが、やはり今求められているんじゃないかと思います。簡単に言えば、ぼくもやってきたんですけど、趣味的に・・・趣味的って言ったらいけないですよ。熱心に社会科を研究している人が、特別な材料を持ってきてやれば、それはもう、社会科でも子どもが食いつくような授業ができると思います。しかし、そういう授業をやっている人も、毎時間それを行っているわけではありません。普段の授業は教科書をうまく使って力を付けています。そういう中に、いくつかマイ教材というか、自分のオリジナル教材を使いなさいって僕は言っています。本日は、そういうのをぶつけていっても、普段の力を発揮できるというのが理想じゃないかと

いうことで各先生方は提案をされていました。全くその通りかなと思っています。そうした中で、来年度のテーマを考える時に、キーワードとして、「教科書活用」「社会科授業の日常化」というようなことが挙がっていました。さらには、「社会的な見方や考え方」ですね。こうしたものが挙がっていましたけど、いくつか整理をして考えたいと思います。

まず、提案された香社研の来年度の方向性に対して、私なりに総括的な答えを出したいと思います。そして、時間の許す限り、今日お集まりの先生方に最も関係の深い「教科書をどう活用するか」ここに時間を割きたいと思っています。

〈教科書の活用について〉

まず、教科書活用の問題を先に申し上げると、僕は、こんなふうに考えているんです。「教科書をどのように活用すれば、社会科が目指す学力が育つ授業を、普段の授業で日常的に展開できるか」です。これには、考えなければならないことが3つぐらいあると思うんです。

それは、何かというと、1つは、そもそも社会科が育てるべき学力、別の言葉で言えば、社会科の役割って何なんですかっていうことなん

です。例えば、先生方、社会科の教科書を見てください。どこを見ても、社会認識ということばはないですよ。あります？無いですよ。そうすると、子どもにとって社会認識、もしそれが学力だとすれば、どうやって説明するのでしょうか。僕は、社会認識という言葉はあまり使いません。普段の授業を考える上でですよ。なぜなら、その言葉を使ってしまうとそこに逃げ込んでしまうからです。では、何が社会認識なのか？教科書に書いてある本文は社会認識なのか、違うのか？では、本文がもし違うとすれば、どこに社会認識ってあるのかっていうのが見えないと先生方が授業できないんじゃないですかね。やはり日常化するのであれば、自分たちの目に見える言葉で読解していくっていうんですかね、社会科が育てるべき学力とか社会の役割というものをやはり見つけてあげないと、子どもには育てられないし、保護者にも伝えられないんじゃないですかね。これが1点目です。

では、2点目に、子どもが教科書を活用すると言いますが、そもそも、教師はどのようにして教科書を分析するのでしょうか。ご存じのように教科書を教材として使っているわけですから、教師がどうやって分析すれば、子どもたちにその学力を付けることができるのかという、教師による教科書分析、その視点とか方向とかをある程度もってないと、子どもに「活用しなさい、活用しなさい」と言っても無理です。まず教師自身が教科書を活用する前の段階として、教科書分析をどう進めるかということのある程度はつきりさせておかないとダメなんじゃないかと思います。

3点目に、これが一番大事なんですけど、子どもが教科書を活用するとは、どんな姿なのかということです。そのために教師はどんな指導をすればいいのかということなんです。

〈子どもが教科書を活用するとはどのような姿か〉

具体から話した方がいいので、3番目から話したいと思います。3番目というのは、子どもが教科書を活用するとはどんな姿なのか、また、教師はどのような指導をすればよいのかということです。考える糸口なり、考えるポイント

なんですけど、一つは、教科書を読むとか読ませるということばがありますよね。これってダメなんです。では、教科書を読むとか、読ませる授業と、教科書で調べる授業というのは同じなんでしょうか、違うんでしょうか。たぶん違うんでしょうね。さっきそういう提案がありました。では、教科書を読む、あるいは読ませるという授業と、教科書で調べるという授業では、どこがどう違うのかということを先生方が整理しておく必要があります。結局、先生方がやっていることをふり返してみると、教科書を読ませることになっていることが大いにあり得るんじゃないのかというのが私の素朴な感想なんです。

そこで、先ほどの実践交流の中でも指導計画を見させていただいたんですけど、これはどう考えても、教科書をどんなふうにしてもですよ、結局読ませているんじゃないのかなっていう指導計画が正直言っていました。何が欠けているんだっていうことなんですけど、調べということを考える時に、普通は、子どもが「分からないな」と思う時に考えさせませんか。分からない時に、「どうしますか？」と言った時に、考えて分かれば何も調べないでしょう。そうすると、大事なものは、分からないという時に、やっぱり考えても分からない時に、調べようと思いますよね。この分からないから調べるという状況になる時に、もう1つ必要なものがあります。何かがあつて分からない、だから考える、考えてみても分からないから調べるという、ここの出発点のクエスチョンがなくて調べるということが入っていませんかっていうことなんです。たぶん、いきなりクエスチョンは出ないんですよ。きっと。その前に、何かに出会う。何かに出会うと、そこで「へえ〜。」となる。そこで、いろいろ考えてみても分からない、また、よく考えてみても分からない、すると、やっぱり調べるっていうふうになりますよね。だから、出会ってクエスチョンが出るというような状況、そして考えてみようかなという状況をつくってあげないと、まず調べるという学習にはいかないんだろうなと思います。うっかりすると「何々の秘密を探ろう」って先生が板書するんですよ。秘密って、裏返しは不思議ですよ。不思議

なことがその前に全然出て来てないのに、「秘密」と板書したって子どもは調べないですよ。本当に不思議だと思わないと・・・違うんですかね。だから、やっぱり大事なものは、ぼくがよく言いますけども、どなたかが言ってくれていてうれしいなと思ったんですけど、やっぱりこれ「！」がないと。「！」っていうのは、簡単に言えば、知的なものじゃなくて、もっと素朴なものですよ。いったいどうやったんだろうなという、「おれも同じ人間だけどさ、できないや。」とか、このクエスチョンというのは、「いったいどうやっているんだろう？どうなってるの？」っていう、これブラックボックスなんです。自分の行動とか、自分の見聞きしたこととは分らない。何かで学ばんです。では、こっちはどちらかっていうと、「何でわざわざそこまでやるの？ぼくも同じ人間だけどさ、そんな大変なことやりたくないもん、何かやっぱりあるんじゃないのかな。」あるいは、「どうやったってうまくいくはずないはずなのに、何かわけがありそうだよ、ね、裏側に何かあるよ、ね。30人ぐらいでできるはずないよ、ね。ああそうか。」ってやって調べると、そこには、たくさんの人たちの「協力」っていうもう一つの姿が見えるとか、ね、だから、ここの「？」っていうのが非常に大事です。そうすると、調べることの中身には、やはり、調べようとする子ども一人ひとりが、どう自分の生活経験から考えてもうまく説明できないとか、どう論理的につなげて考えてみても、どうも分からない、そういうものがやっぱりあって調べる学習になるのではないのかと思います。このように考えると、子どもが教科書を活用していくといった時に、教科書で調べるためには、そこに入り込ませる、そのページに入っていくための指導や仕掛けが必要だということですよ。だから、一番簡単なのは、教科書の中のこういう「？」や「！」が生み出されるようなものが大切です。例えば、教科書に載っているものの実物とか、その中の1枚の大きな資料だけを出して、そこに子どもの経験とか既習で解釈させていって「？」を出すとかっていう資料をやっぱり入口につくっておく、それがないとだめなんですよ。

それから2つ目の本文記述をどう活用すれば、

またはさせれば、子どもが考えるようになるかという問題。多くの場合、教科書に答えが書いてあるってよく先生方が言うんです。裏を返せば、考えなくても教科書を読めば答えが出てくるというようにその先生は考えているわけですね。その時に、教科書の本文記述というのはどう活用すればいいのかということさえ分かっていたら、逆に教科書の本文記述があったほうが、教科書の使い勝手がいいというのが僕の持論なんです。では、自分の場合どうやってきたか、あるいは指導主事時代にどうやって教科書の使い方を、先生方にまあやってみて下さいって言ってきたかという一例を出します。これが全ての答えではなくて、やはり先生方自身が教科書の本文をどういうふうに活用することが、子どもが考える授業になってくるのかということをやったり考えるべきだと思います。僕は、自分のことを思い出してみたんですけど、大事なものは、まず始めに、本文に例えば「こう何々」と書いてあるとしますよね、本文に「これこれ・・・」と、いろいろ書いてあります。「この辺に多く分布している。」とか書いてあるんです。そしたら、最初は先生でもいいんですけど、「そのことは・・・」と言って、教科書のこのページのこの資料のここを、例えば、資料1とか2とかAとかBとかのうちのここを見れば分かるよと言えることが大切です。何が言いたいかというと、まず、こう書いてありますよと言うのと、そのこととそのことはここを見れば分かりますよと言うこと、つまり根拠なんですよ。根拠になる資料とその中のこの部分を見ればいいという資料の中の着眼点、そこから何かを導き出せる、それが一番いいんですよ。こう書いてある。そのことは、この資料のこのところを見れば分かる。そのことから私はこのことが言えるんじゃないかっていうようにして。この「何か」っていうのと「言える」っていうのは大切です。「分かる」っていうのは解釈です。どちらかっていうと「推理」。これ思考なんです。多くの先生方はこう書いてあるっていうことを見つけて、思考してる、分かっているふうに思い込んでいてただであって、ただそこに書いてあるだけなんです。だから、大事なものは、ここにこう書いてある、では、その根拠はどこを見

ればいいのだろうというように普段から確認していく。じゃあ今度は、書いてあるだけじゃなくて、「そのことはこんなふうに言えます。」「ここここに書いてあります。」「ここを見ればそれが分かります。」というところまで発言しそうですねって約束をつくるんです。できれば、「そのことから私はこのことが言えます。」と言えるようになることすばらしいです。要は、子どもたちが自ら推理するようになるわけです。

もう一つ考えておきたい大切なことは、例えば、この部分をすっ飛ばしちゃって、そこはこういうことが言えるって言いますよね。その子の裏側には、実はこれとは違った根拠があることを教師が知るべきなんですよ。それは何かって言うと、生活経験とか、普段の生活で見聞きしていることとか、それまでの学習経験とかです。ですから、場合によっては子どもたちが、「ここにいるよ。」って言ったら、そこで、「うんうんなるほど。どうしてそういうふうに考えたの？」って一言こう言ってあげる。「そうしたらそのことを今度入れてね。」と言ってあげる。

「自分の家ではこうこうしているから。」「自分のおとうちゃんとかあちゃんがこうやってよくしゃべっているから。」とか、あるいは、「前の学習した姿がこうだったから。」っていうことを言ってねと言ってあげる。実はその裏側に働いている経験とか見方、知識というのが、その子の見方や知識なんですよ。

例えば、僕が授業をやっていた時に、水産業の単元を扱いました。そこで、育ててとる漁業について授業をやりました。その後に森林資源の働きというところにいったんです。そうしたら、まあ早い話が伐採した後、そこに木を植えればいいと。育てる漁業と同じですからっていうふうに子どもが言ったわけですよ。なるほどなと思いましたね。木を切って、そのままにしておくじゃなくて、切っちゃったから、そのところにもう一回植えれば、それでまたいいんじゃないか。本当は逆なんですよ。きつとね。もともと林業があつて、栽培があつて、それで漁業の方でも栽培漁業というように呼ぶようになったんでしょうね。子どもは学習した順番をよく覚えていますから、学習したことを使って、林業の説明をしているわけですけど、

もともとはたぶん逆なんですよ。でも、子どもにとってみれば既習は林業だから、その言い方を活用して説明しているわけですよ。もう完全に思考している。

ということで、ぜひ先生方は、授業の中で、本文にこう書いてあるといったところを見つけたら、それをまた、書いてある通りじゃだめだよって言うんじゃないで、その見つけたこととどこをどうつなげていけば思考になるのかっていうことを、子どもを認めつつ、子どもを育てていくような方法で、足りないところを補っていく。これを考えていくのが教師の仕事だと思うんですね。これは、私の一例なんですよ。だから、先生方は、「教科書は今日、閉じて隠してね。」と言ったこの言葉は、イコール教科書に書いてあるところまでが考えた結果だということ子どもに表明しているようなものでしょ。結局、先生方自身が考えられていないことが多いんです。このところがポイントです。

〈教科書をいかに分析するのか〉

そうすると2つ目に、じゃあ、先生方がさっき言った、教師はどのようにして教科書を分析すればよいかということについてお話しします。さっきどなたかが使ってくれていましたけど、私が書きました『授業実践ナビ』という本で、教科書の活用について具体的に少し入れてあります。時間が短いので、もし興味ある方は、見て欲しいと思います。

教科書は、だいたい見開きがワンテーマでできてるじゃないですか。それで、もう一つ大事なのは、教科書は何ページかで一つの単元っていうのをつくっているわけです。そうすると、教科書の大きな単元構成は、大単元に入り込んでいるときに、単元の内容に入り込ませるためのページが、大単元の入口なり、あるいは小単元の入口なりに、仕掛けでつくってありますよね。そこで、このところで子どもたちが、やはり、自分がそのページに立つなり、入り込むなりっていう自分発が欲しいですね。それこそ、金沢じゃないけど・・・。この中身そのものが、それこそ学んでいく社会だとすれば、最後に出て行く時のもう1回自分に返るという、この中身の部分が教科書の本文ですよ。教科

書というのは、ある特定地域の特定の子どもを想定して、学習活動を組んでいるんです。すると、ここは、一般化できないページなんです。だから、この内容に入っていくためのページ、このところをまず工夫する。自分の目の前の子どもに合うように、もっと言えば、今まで学習してきた既習が生きるように、また、地域、家庭環境が生きるようにする。まず、この工夫ですよ。

また、当然出口のところの工夫も大切です。出ていくところ。まず第一に、こういうふうにして教科書全体を大きな目で見た時に、これは、全国どこでも使えるページとある特定の子どもを想定したページがあるから、その部分については、少し一ひねりして自分の目の前の子どもたちに合うようにしてみることが大切です。僕がお勧めするのは、物の活用、実物の活用なんです。見えるものからその裏側に人間の顔が出てくるようにしておいて、じゃあどうやってその人間はやってるんだろうねというふうに見ていくというのが、僕のストーリーですね。物から入る、物はさわれますし、いろいろできますから。だけど、物で終わったら社会科にならないので、その物をつくった裏側の人間の顔が出てくるようになってきたら、その顔が見たいねと言って子どもは昭和にタイムスリップしたり、遠い地方まで飛んでいったりするのです。

それから、もう一つ大事なものは、例えば、この見開きのページをやる時に、子どもに、この本文はどこのことを根拠にしてとかっていうようにやらせたいわけでしょう。そのためには、まず初めに、先生の方でこのコピーを取って、その本文のこの部分は、この資料からといって結びますよね。この資料にどういうふうな発問をすればこれが出てくるのかという部分を、しっかりと、まず言葉で付箋でも何でもいいですからつくっていく。これが教科書分析だと思いますよ。同じものを見たって問いが違っちゃうと、出てくるものが違うんですから。それが社会科です。だから、やっぱり教科書に出てくるようなこの写真なり資料なりとどこがつながっているのか、その写真や資料に対してどういう問いを出せばこれが出てくるのか、気付いたことでいいのか、もうちょっと突っ込んだ発問を

しなきゃ出てこないのか、多くの場合、写真を出して気付いたことしか問わないからいろんなものが出ちゃうんです。だから、拡散した方がいいのか集約した方がいいのかっていうこと、クエスチョンの部分をしっかりそこでつくっていくこと自体が、教科書の分析になります。単元全体のマクロの分析とページごとのミクロの分析ですかね、ここをやっぱりしっかりやっていくということをやれば、教科書を使いこなせるはずだと思います。

日常、明日、明後日っていうふうにして、きめ細かくやっていくのは今まで述べてきたとおりです。もう一つは、大きなサイクルで、学年をもったときに、一応ざっとおおざっぱに上・下巻全部見ておいて、こういうところの内容に導入していくということを見通しておかないと、すぐにはやっぱり見つけられないですよ。だから、大きなサイクルというのは新しい学年、例えば来年何年生かもちますよね。そしたら教科書の上・下巻を見ておいて、ああこういう内容に入っていくぞ、こういう内容にいずれ入っていくぞっていう時に、日頃から何か使えるものはないかな、使えるものはないかなって、やっぱり、やっとなかないとなかなか見つからない。一方、こちらはむしろ細かくやっていくわけでしょう。だからそれは、付箋でも何でも入れといたりしながら、来週の授業については、日曜日にやっとうこうとかですね、明日の授業については今日やっとうこうかっていうふうにして、教科書に付箋を貼るだけだっていいわけですよ。これぐらいはですね、教師による分析が必要だろうというように思うわけですよ。

ということで、具体の話を先に2つしました。もう一度整理しますと、子どもが教科書を活用するというのは、どんな姿をイメージするか、まず、自分がそのイメージをもつ。そして、その時に教師はどんな指導をすればよいのか考え、普段の指導を工夫する。また、先程の例の一つとして、教科書で調べるというのは、子どもがどういうふうになった時なのか考えておく。僕の持論は、調べる前には当然子どもが調べなきゃならないような状態にする。つまり、クエスチョンをもたす。とにかく、そういう状況をつくってあげて、「どうしようか、やっぱり調べて

みようよ。」っていうふうに行くということですよ。これは、見学学習も同じですよ。「はい来週、何々見学に行くからね。」と言うと、子どもは喜びますよ。「ぎゃーっ。」って言ってね。だけど何のための見学なのか、何を見に行く見学なのかってありますよね。それをやっておかないと、まず子どもはよい成果を得られない。もっと言うと、子どもが本当に調べる、見学してみたいって気持ちが無くて連れて行ったら、見えますよ。そりゃ先生の言う通りに……。だけど、今度、社会科嫌いになりますよ。だって見に行きたくない人だっているでしょう。めんどくさいとか……。やっぱり、見たいっていう気持ちを、本当に見なきゃ分かんないとか、こういうところを見てみたいっていうクエスションが出てきて、それで、どうすればいい、見に行きたい、じゃあ何を見てくればいいのっていう先に「見学」が出てくるようなことをやらないと駄目だと思うんですよ。

〈社会科の学力とは〉

それでは、ここからは、これからの社会科で絶対に考えなければいけない大切な2つのことについてお話ししたいと思います。1つ目は、どっちかって言った時に、間違いのない、できるだけ間違いのない答えを出す。どっちだという時にね。これが1つです。それから、2つ目は、「公共」とは何かっていうことについて、ある程度一人ひとりが自分の公共観というものをもつということです。これが、私が育てないといけないと思っている社会科の学力なんです。これを融合したもの、結びつけたものが、「社会的な見方や考え方」なんですね。

まず、教育基本法の改正によって社会科はますます大切になってきます。なぜか、次の一言が大変に重たいんですね。大事な文章ですから読み上げさせていただきます。「公共の精神」について、衆議院の教育基本法に関する特別委員会、ここで、当時の小坂文部科学大臣は次のように言っています。

「公共の精神とは、国や社会の問題を自分自身の問題として考え、そのために積極的に行動するという精神というものでありまして、今後の教育において重要な理念として、法案の前文と

第2条に規定することとなったわけであります。」

じゃあ、その法案の内容は何でしょう。それは、次のような文章です。

「公正な判断力並びに公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」

私が、非常に不安に思っているのは、肝心要の公正な判断力、公共の精神に基づきという言葉がすっ飛んじやって、教育現場は、「社会形成参画」「社会形成参画」ばかりです。言っている意味が分かるでしょう。だから、「社会形成参画」は、裸で出てくる言葉じゃありません。もともとは、「公正な判断力」ならびに「公共の精神」に基づくんですよ。その部分をぴしっと解釈しとかなないと一人歩きするんですよ。言葉が。では、どういうことかって言うと、社会科が非常に大事なものは、社会科固有の役割として、社会生活の理解を通して国家・社会の形成者を育てるってことです。では、国家・社会の形成者を育てるという時に、まず、国家の形成者と社会の形成者を中黒で結んでありますから、社会の形成者でもないし国家の形成者でもないんです。ここに中黒が潜んでいるんです。どういうことかという、社会科が本来生まれたのは、今の民主社会、もっと言えば一見民主社会、もっと言うと、憲法に基づく社会。さらに言うと、憲法に基づいて、今は少なくとも三権分立の中で政府がつくられて、我々が選挙して、その代表を選んでというような仕組みになっている社会ってことです。この中で、まず生きているっていうのが国家です。民主国家。その形成者を育てる社会科論のはずです。

じゃあ、これを支えているのは何かというと、一つは社会への参加権、国家への参加権、税です。それに対して、税を払っているから、私は1票投じますよという選挙権。このように、ギブアンドテイクの関係。選挙権をもらって、税を使うことを委託した政府が、どう税を使うか、その部分の大元を決めるのが国会です。国会は予算を決めることが一番大事ですから、その予算の使い方について我々は、意見を言うわけですよ。今一番それは、社会保障の問題で言うでしょう。その財源はどこに来るかっていう

と、最後は自分たちでしょう。かかってくるんですから。税に来ますから。こうした時に、ここの部分というのは、実は、最も国家を支えている公共でしょう。公共的行為なんです。大事なものは、私たちは、選挙権をもっています。でも、もっていても、その選挙権でできるのは、代表を選ぶことだけです。だけでも、最終的には、自分たちの願いが実現できるように、みんなの願いが実現できるようにっていうふうにして使われているかどうかは、一人ひとりが、見極めて判断しなければいけないわけです。こっちだって言ったら本当に正しいのか、こっちが正しいのか、どっちなんだろうということですよ。そうすると、ここでは、実は、1票を選ぶ大事さもありますけども、その税がちゃんと、みんなのために使われるかということですよ。では、大事なものは、そのことについて、みんなはどう見ているのか、みんなはこう見てるんだということをみんな納得すれば、そのために使われてもいいわけでしょう。そうすると、我々は、みんなの見方何なのかってことをきちっと捉える必要があるんですよ。私の見方も大事ですよ。だけど、私の見方だけじゃなくて、これが、今のみんなの見方なのねっていう話なんです。そうすると社会科というのは、人と人が社会を創りますから、今ある社会の中では、どれが一番みんなの見方として正しいのかということをきちっと見極めていく目を付けないと駄目でしょう。そうすると、ここのところで、公共的になっていうのは、早い話がみんなの願いっていうのをまずきちっと見極めて、そのみんなの願いが、できるだけ社会において実現できるようにしていくっていう見方で見ることでしょう。その時に社会科が大事なものは、そのみんなというのが、どのくらいの範囲を指すのかっていう問題があるわけですよ。我が国だけでいいのか、国際社会なのか、自分の地域社会なのかってことです。そこが一つ大事でしょう。

それからもう一つ大事なことがあるんですよ。何かってそれは、ここで、みんなが願っている、それを全部税と選挙の関係でやっちゃったら、それこそ、税金いくら払っても足りないってことです。例えば、うちなんかいつもそう

なんですけど、非常に細かなごみの分別をしてるんですよ。でも、横浜に住んでいるいとこが来ると、「そんなこと、やんないよ。」って言うてるわけですよ。じゃあ、何が違うんでしょう。焼却処分場の施設、これが違うんですよ。横浜みたいなところは財源が多いので、立派なのが買えるから、かえって、分別しない方がいいんですよ。だけど、ぼくの住んでいるところは、財源がないから、そうはいかないわけです。横浜のようにやれっていうんだっただすね、ものすごい施設を税金を使って買えばいいんですよ。そうすると、市民税を上げればいいんですよ。っていう話になるわけですよ。そりゃ待ってくれでしょ。そうすると大事なものは、少なくとも税には限度があるから、自分たちでできることは自分たちでやった方がいいんじゃないですか。っていう、もう一つのここに、共にとか、自らとかっていうのがあって、こういうふうなところでも、世の中をよりよくしていく、願いを実現していくっていう、そういう人の関わりがあるっていうことでしょう。

このことが、一番はっきりしたのは、この裏側にも出てくるんですけど、この頃は、今の時代と違っていたので、「阪神・淡路大震災の経験を経て、ボランティア等によって、自分たちによってよりよい社会をつくるのが我々の責務であるということが実証された」と書かれてあるんです。答弁なので……。そうやって、やっぱり、自分たちでってありますよね、共に、自らですよ。そうすると、この2つって言うのは、こっちが減れば（選挙権）こっちが増える（税）関係なんですよ。こっちが増えれば（選挙権）こっちが減る（税）関係なんですよ。この中に入っているのは、その関係をどうやってつくっていくことが、これからさらによりよい国家・社会になるかということは、その社会を担っている人間にかかっているんですよ。だって、今だって福祉のために、税金をどうしようかって言って、いや、こっちの財源をもってきたほうがいいのか、いや入れない方がいいのかとかって言うてるわけでしょう。税金を減らして福祉のアップは無いんです。でも、今、非常に迷ってるのは、みんな知ってますよね。消費税を上げたら、それに対して、公正な判断

から見た時に、不公平が生じちゃうんですよ。意味が分かりますかね。これも社会科の見方なんですけど、公正というもののにも、手続き的公正、機会の公正、結果の公正というものがあります。例えば、どういうことかっていうと、もし、消費税を5%上げると、全員一律に上がりますよね。そうすると、だれもが、5%上げられてるんだから、少なくとも、機会均等なんです。それが、みんなの合意で手続き的に良ければ、手続きの合意もOKなんです。だけど、ここには弱者が出ちゃうんですよ。総所得の低い人にとってみれば、5%は痛いんですけど、総所得が多い人は5%は痛くないんですよ。そうすると、ここでは不公平が出るでしょう。このようにして考えると、社会というのは、どれか1つが正しければ、どれかが正しくないってことが出ちゃうんですよ。じゃあ、どれが本当に公共なんですかねっていうことをみんなの合意で考えていく、それを創ってるのが社会。ただし、対価というのは、きちっと、どれにも、一部一利あり、一部デメリットありみたいなものをちゃんと明らかにしておきながら、今、現状みんなはどれを判断しますかっていうことになる。だから、社会科において、「社会的な見方や考え方」をつくるためには次に挙げる2つしかないんですよ。

〈社会的な見方や考え方をつくるには〉

1つは何かって言うと、まず、私の見方や考え方っていう、私の見方をつくってあげなくちゃいけないですよ。そのための1つの方法が考えを書かせておいて子どもにみんなに丸を付けて「みんな考えを持ったね。いいよね。」っていう、スタートラインをそろえることです。また、前時の復習から入ってあげることです。これが1つ目です。

2つ目は、私とあなたは違うけれども、概ねいくつかの考えになりますよねって板書でやるじゃないですか、何かを聞いて、じゃあこの中のどれかに入ってる？入っているよねって、じゃあ、このどれかに入っているというのは、無関係なのか、関係あるのかって言いながら、関係づけていって、じゃあ、全部まとめてみると何とかならないとかいうふうにしながら、いく

つかのグループの類型を今度は、関係付けたり、まとめたりするでしょう。比較、関連、総合して考えるんですよ。あるいは、その言葉がうまく説明できなかったら、再構成して、言葉をつくってこれだっていくつかにするんです。そして、まとまったっていう話になっちゃうんです。これでみんなのでいいですねってこうやるでしょう。このプロセスが、みんなの見方をつくる、社会科の見方を育てるめあてなんです。その答えは2つなんです。

1つは、学習内容論としての、「みんなの」っていうこととか、「共に」とかいうものが、今回の学習指導要領の中にはいっぱい入れてあるんですよ、実は、それで学ぶから、内容論として。それから、もう1つは方法論として、みんなで学び合うという言語活動です。そのことによって、学びの公共性を出しているんです。学習論なんですよ。その2つをきちっとやって初めて、ここで言っている、みんなの見方や考え方がつくれる、公共的な役割を果たす社会科ができるということであって、決して、難しいような認識だとか、構造だとかってやっちゃうと、社会科嫌いになるし、分からなくなるし、本質をそぐ恐れがあると思います。

〈おわりに〉

どうか社会科を難しくしない方がいいですね。どうも最近の社会科は難しく感じるんですよ。先生方、本当に分かってない言葉は使わない方がいいと思います。やっぱり、分かる言葉で、分かりやすく考えていってください。だって、社会ってみんなが営んでるんですから。そういった人が、相手を説得して初めてみんなの考えをつくれるわけですから。やはり、こういう中でですね、社会科をやっぱり好きになる、子どもをやさしくしつける、教えるということは、先生方自身が日常のことや身の回りのことに置き換えて、考えていってください。クラスにどんな学力の子がいても、みんな社会の形成者ですよ。そういう子どもたちを考えた時に、難しくしちゃうたら、だめじゃないかなと思います。キーワードは、「公共」「社会的な見方や考え方」。それは、「みんなの」ってことですね。

以上です。

